

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事業報告書

第9巻

平成23年度

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

巻 頭 言

石川県立看護大学地域ケア総合センターは平成23年4月の公立大学法人化とともに1年余りの検討期間を置いて、組織の見直しを図り、「人材育成」、「地域連携・貢献」、「国際貢献」の3部門に再編いたしました。大学として多様な地域の健康ニーズを探究し、事業を展開して参りましたが、地域ケア総合センターを本学の組織的な地域連携の窓口、地域住民や看護・介護等の専門職、企業、行政等からの相談窓口として双方向の活動を支援できる拠点として一層の充実に努めてまいりたいと決意を新たにしているところであります。

平成23年度の大きな取り組みのひとつに、石川県における地域連携促進事業（高等教育機関連携特別枠）に本学から応募し、採択されたことであります。「来人喜人里創り創成プロジェクト事業」として能登町との連携が始まりました。能登空港を会場に行った「きときと朝ご飯レシピコンテスト」は県内外からの応募をいただき盛況に行われました。地域の行政、住民のみなさまとも一体となって取り組めたと思います。新たな地域連携のモデルにならないかと期待を寄せております。

また、かほく市との包括的連携協定締結1周年記念事業を本学の大学祭の日にあわせて「認知症にやさしいまちづくり」シンポジウム（かほく市主催）を実施いたしました。本学の教職員が地域の住民とともに知症の啓発や理解の促進のために築いてきた活動の成果報告の良い機会をいただきました。

大学と地域が連携して健康づくりのために取り組めることは、無限大の可能性があると考えております。地域ケア総合センターを「地域連携・貢献」の拠点として、さらなる進化が遂げられますようご支援いただきたいと願っております。

平成23年度の当センターの成果をまとめましたので、県民の皆様に本報告書（第9巻）をお届けいたします。ご覧頂き、ご意見を頂戴できれば、幸甚に存じます。

石川県公立大学法人 石川県立看護大学
学 長 石垣 和子

地域ケア総合センター「事業報告書（第9巻）」発刊に寄せて

平成23年度は本学の公立大学法人化初年度で、地域ケア総合センターの再編に向けた布石を敷きながら事業をすすめてきた年でありました。

本報告書は、平成23年度に実施いたしました地域ケア総合センターの5つの事業「人材育成」、「指導助言」、「情報発信」、「国際化促進」、「調査研究」に関してまとめたものであります。もっとも大きな事業として取り組みましたのは、かほく市との包括的連携協定にもとづく「認知症にやさしいまちづくりシンポジウム」でした。行政・地域の各種団体・大学・学生が実行委員会形式をとり、一体となってまちづくりについて考える機会をいただきました。500名近い参加者を得て、認知症の啓発活動に一役買ったといえましょう。その他、一般県民向けの公開講座では本学の教員のコーディネートによる「温泉を利用した健康づくり」と題して講演会を行いました。温泉地として知られる石川の名湯は、健康づくりに生かせることを県民の皆様にお伝えできたと思います。

また、「東洋医学と看護のコラボレーション」、「摂食・嚥下障害者への看護援助技術」、「アサーションを多職種・多機関との地域連携・協働に活かそう！！」など専門職向けの研修ではのべ300名近い参加を得ました。その中のいくつかは、能登地区の研修会開催を取り入れ、能登空港行政センターで実施できたことが特徴でありました。

教員の研究や実践の成果を生かした子育て支援事業（ノーバディズ・パーフェクト）や各分野の事例検討会などを開催いたしました。地域ケア総合センターの「人材育成」機能を通して、県民のみなさまにさまざまにケアの知識や技術を還元できる機会になったと捉えております。

さらに、平成23年度から、石川県における「看護教員養成講習会」を3カ年にわたって委託事業として開催することになりました。第1期生が31名修了されました。また、「介護職員による喀痰吸引等の研修事業」（石川県社会福祉協議会福祉総合研修センター主催）も本学を会場として実施協力することになりました。初年度は200名余りの研修修了生を輩出いたしました。いずれも石川県における人材育成に関する行政課題に応える取り組みであったと考えます。本学のセンター機能の拡充を考える事業となりました。

今後も、看護大学らしい健康に資する事業を皆様方のご意見をいただきながら展開できればと願っております。本報告書を通して本学センター事業をご理解いただき、ご意見ご要望をお寄せいただければ幸甚に存じます。

地域ケア総合センター長 川島 和代

目 次

1	人材育成・講師派遣	
1-1-1	公開講座	1
1-1-2	臨床看護の質向上プログラム	1
1-1-3	地域連携促進事業	2
1-1-4	看護職現任教育	2
1-2-1	各種研修会等への講師派遣事業	3
1-2-2	病院への事例・看護活動・研究等の指導助言実施状況	6
2	指導助言	
2-1	高齢者ケア事例検討会	7
2-2	ペリネイタル・グリーフケア検討会	8
2-3	ノーバディズ・パーフェクト完璧な親なんていない！プログラム	10
2-4	子育て どろっふ・イン・さろん	11
2-5	祖父母の楽しい上手な孫育て教室	13
2-6	あかちゃんをお空へみ送った方の自助グループに対するサポート活動	14
2-7	医療英語セミナー	16
2-8	赤ちゃんふれあい体験	18
2-9	プレママ・プレパパ支援	19
3	情報発信	
3-1	オープンキャンパス 2011	21
3-2	大学新聞キャンパスネットの発行	22
4	国際化促進	
4-1	夏期アメリカ看護研修	23
4-2	パラグアイ日系研修「高齢者福祉におけるデイケアサービス」	24
5	調査研究	
5-1	指定介護老人保健施設における終末期ケアの現状と課題 －医療連携と技術力強化を目指した研修プログラムの開発	27
5-2	要介護状態となる原因疾患等の調査研究	36
5-3	地域における看護師の自己実現を通じた医療の充実を目指して －看護師の自己実現を支援する取り組みの現状と展望－	38

5-4	パートナーシップを基盤とした Community-Based Participatory Research(CBPR)が コミュニティ能力を向上させるプロセスの評価と理論化に向けた研究 ー石川県内の自主グループと協働して取り組む健康増進活動を通じて……………	43
5-5	セルフヘルプグループを基盤としたサポートネットワークシステムのエンパワーメント 効果に対する実証と理論化の研究 ……………	47
6	その他	
6-1	かほく市との包括的連携協定に基づく事業 ……………	51
6-2	石川県からの委託事業、協力事業 ……………	54
6-3	石川県立看護大学公開フォーラム「ナイチンゲールからの贈り物」 ……………	57

1 人材育成 講師派遣

1 人材育成・講師派遣

1-1 各種講演会及び研修事業

1-1-1 公開講座

一般県民等を対象に、健康・福祉・介護に関する公開講座を下記のとおり実施した。

■日時・内容・講師

回	開催日	内容	講師
1	6月18日(土)	温泉を利用した健康づくり	富山大学 名誉教授 鏡森 定信
2	10月22日(土)	地域でどう生き、どう死ぬか	石川県立看護大学 教授 浅見 洋

■場 所 ①県立看護大学 中講義室1 ②かほく市ほのぼの健康館

■参加者 ①52名 ②67名

1-1-2 臨床看護の質向上プログラム

看護及び介護支援に役立てることを目的に、看護職者を対象に下記講座を実施した。

■日時・内容・講師

回	開催日	内容	講師
1	6月11日(土)	東洋医学と看護のコラボレーション	富山大学附属病院 副看護師長 四日 順子
2	7月9日(土)	摂食・嚥下障害者への看護をエキス パートナーズに学ぶ	金沢医科大学病院 看護師長・老人看護 CNS 直井 千津子
3	8月6日(土)	県内における専門看護師と認定 看護師のコラボレーション	公立能登総合病院 老人看護 CNS 関 利志子 金沢医科大学病院 糖尿病看護認定看護師 北出 優華子 公立能登総合病院 精神看護認定看護師 岡浦 真心子
4	9月3日(土) ・ 17日(土)	がん治療薬の基礎知識	石川県立看護大学 教授 多久和 典子

■場 所 ①・②・③奥能登総合事務所 会議室

④県立看護大学 研修室

■参加者 ①45名 ②40名 ③30名 ④45名

1-1-3 地域連携促進事業

県民の健康に関わる医療・保健・福祉の多職種が良い関係性を保ちながら、連携・協働することを目的に、下記講座を実施した。

■日時・内容・講師

開催日	内容	講師
11月 5日 (土)	アサーションを多職種・多機関との地域連携・協働に活かそう！！	東京医療保健大学 教授 近藤 浩子

■場 所 県立看護大学 成人・老年看護学実習室

■参加者 52名

看護学生の学習のために患者役を担うボランティアを養成するため、下記講座を実施した。

■日時・内容・講師

開催日	内容	講師
7月 2日 (土)	看護大学サポーター養成講座	寺井病院 医師 岩田 竹矢 のぞみ会会員 (模擬患者) 石川県立看護大学 教授 川島 和代 助教 田村 幸恵 助手 三輪 早苗
・		
9月17日 (土)		
・		
11月12日 (土)		
・		
2月 8日 (水)		

■場 所 県立看護大学 研修室

■参加者 53名

1-1-4 看護職現任教育

保健福祉センター等に勤務する保健師の専門的技術の強化を図ることを目的に実施した。

■日時・内容・講師

回	開催日	内容	講師
1	12月 6日 (火)	コミュニティ・アセスメント 研修会	石川県立看護大学 学長 石垣 和子
2	12月15日 (木)	保健福祉従事者向けコーチング 研修会	株式会社 office・CanDo 代表取締役 宮永 満祐美

■場 所 ①奥能登総合事務所 会議室 ②県立看護大学 研修室

■参加者 ①4名 ②4名

(人材育成事業 参加者合計392名)

1-2-1 各種研修会等への講師派遣事業

分野別派遣回数

番号	1	2	3	4	5	6	
種類	病院等	職能団体(看護協会等)	行政	学校・教育機関	福祉・高齢者関係の任意団体	その他	計
回数	38	18	26	9	24	6	121

No.	派遣講師	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類
1	教授 浅見 洋	H23.4.23 10:30～12:00	北國新聞会館	金沢検定対策講座上級	財団法人北國新聞文化センター	6
2	教授 西村 真実子	H23.4.11 16:00～16:30	老人保健施設「なでしの丘」	まちの保健室実行委員会	まちの保健室	2
3	教授 村井 嘉子	H23.5.14 13:30～16:00	能美市立病院	看護研究指導	能美市立病院	1
4	教授 浅見 洋	H23.6.20 10:30～12:00	国民宿舎能登やなぎだ荘	能登町家族介護教室	能登町社会福祉協議会	2
5	講師 米田 昌代	H23.4.17 13:30～16:00	SIDS家族の会 北陸支部	SIDS家族の会 北陸支部ミーティング(医学アドバイザー)	SIDS家族の会 北陸支部	5
6	講師 米田 昌代	H23.4.24 13:30～16:00	石川県NPO活動支援センター	あかちゃんをお空へみ送った方の自助グループサポート活動	ひまわりの会	5
7	准教授 垣花 渉	H23.5.14 10:30～12:00	しいのき迎賓館	「石川県の市町」授業コーディネーター	大学コンソーシアム石川	6
8	講師 中道 淳子	H23.5.15 10:00～11:00	かほく市七塚健康福祉センター	七塚女性会指導者講習会	かほく市七塚女性会	6
9	助教 田甫 久美子	H23.5.28 9:00～12:30 H23.7.2② H23.9.3③ H23.11.19④	浅ノ川総合病院	看護研究指導・講評	浅ノ川総合病院	1 1 1 1
10	教授 浅見 洋	H23.5.21 14:00～16:00	石川県西田幾多郎記念哲学館	県民大学校「西田幾多郎哲学講座」	石川県西田幾多郎記念哲学館	3
11	講師 藤田 三恵	H23.6.25 10:00～12:00	能美市立病院	看護師に求められる判断力	能美市立病院	1
12	教授 武山 雅志	H23.5.18 15:30～17:00	石川県立大学	学生からの相談を受けるための心得等について	石川県立大学	4
13	教授 村井 嘉子	H23.6.18 10月上旬 3月中旬	珠洲市総合病院	看護研究指導・講評	珠洲市総合病院	1 1 1
14	講師 川村 みどり	H23.5.27 14:00～18:00 H23.7.26② H23.8.25③ H23.11.15④ H24.2.23⑤	公立つるぎ病院	看護研究指導	公立つるぎ病院	1 1 1 1 1
15	講師 米田 昌代	H23.6.6 10:00～12:00	津幡町役場	小さな天使のママの会ミーティング	津幡町社会福祉協議会 親子サロン	5
16	教授 川島 和代	H23.5.25 17:30～18:30 H23.6.23② 8月③ 10月④ 2月⑤	公立宇出津総合病院	看護研究指導	公立宇出津総合病院	1 1 1 1 1
17	准教授 阿部 智恵子	H23.6.3 13:30～	ほのぼの健康館	かほく市地域自立支援協議会委員	かほく市健康福祉課	3
18	教授 川島 和代 講師 中道 淳子	H23.6.15 13:30～15:30 H23.6.28② H23.7.20③ H23.8.24④ H23.9.28⑤	内灘町役場 他	内灘町徘徊高齢者見守り訓練	内灘町地域包括支援センター	3

No.	派遣講師	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類
19	教授 吉田 和枝 嘱託 室谷 真美	H23.6.17 10:00～11:00	翠星高等学校	思春期の性と性感染症の予防	石川県立翠星高等学校	4
20	講師 中道 淳子	H23.6.28 15:10～16:00	野々市明倫高校	大学出前講座	石川県立野々市明倫高校	4
21	教授 今井 美和	H23.6.10 14:10～16:00	七尾高等学校	スーパーサイエンスハイスクール事業 「子宮頸がんとHPV」	七尾高等学校	4
22	講師 米田 昌代	H23.7.6 9:00～14:00 H23.7.13② H23.7.20③ H23.7.27④ H23.8.3⑤ H23.8.10⑥	児童家庭支援センター ファミリーステーションいなみえん	親育ち支援プログラム Nobody's Perfect 完璧な親なんていない！	児童家庭支援センター ファミリーステーションいなみえん	5 5 5 5 5
23	助教 東 雅代	H23.7.4 17:30～18:30 H23.7.11② 8月③ H23.9.12④	志雄病院	ケーススタディについて学ぶ	志雄病院	1 1 1 1
24	准教授 山岸 映子	H23.6.22 15:05～15:55	輪島高等学校	生と性	輪島高等学校	4
25	講師 中道 淳子	H23.7.1 19:30～21:00	木津老人会館	中高年の健康づくり	かほく市木津婦人会	6
26	教授 林 一美	H23.7.3 10:00～16:00 H23.7.4② H23.7.5③	石川県看護研修センター	災害看護研修会	石川県看護協会	2 2 2
27	教授 多久和 典子	H23.6.28 15:30～16:30	やまじゅう	金沢北社会保険委員会 河北支部総会	金沢北社会保険委員会 河北支部	2
28	教授 浅見 洋	H23.8.20 H23.8.21② H23.8.22③ H23.8.23④	石川県西田幾多郎記念哲学館	夏期哲学講座	石川県西田幾多郎記念哲学館	3 3 3 3
29	教授 西村 真実子	H23.8.9 10:00～11:30	石川県庁	児童福祉司養成研修 (児童虐待援助論)	県少子化対策監室	3
30	講師 米田 昌代	H23.6.26 13:30～16:30	石川県立看護大学	SIDS家族の会主催テキストセミナー	SIDS家族の会北陸支部	5
31	教授 西村 真実子	H23.8.1 9:30～16:30 H23.8.2② H23.8.3③ H23.8.4④	石川県母子福祉センター	NPファシリテーター養成講座	いしかわ子育て支援財団	3 3 3 3
32	准教授 垣花 涉	H23.7.16 10:30～12:00	しいのき迎賓館	地域と大学の連携について	大学コンソーシアム石川	6
33	講師 藤田 三恵	H23.8 H23.10② H23.12③ H24.2④	公立羽咋病院	事例検討会	公立羽咋病院	1 1 1 1
34	教授 牧野 智恵	H23.8.2 17:30～19:00	金沢社会保険病院	「ナラティブ」とは	金沢社会保険病院	1
35	教授 浅見 洋	H23.9.9 17:00～18:30	しいのき迎賓館	老いの豊かさについて	大学コンソーシアム石川	6
36	講師 中道 淳子	H23.8.5 14:00～	内灘町役場	暑い夏を乗り切るには	県市町村職員年金者連盟内灘町支所	5
37	教授 多久和 典子	H23.9.13 14:00～16:00	県保健環境センター	所内技術職員研修会	県保健環境センター	3
38	教授 川島 和代	H23.8.24 10:00～12:00	津幡町役場	いきがい手帳活用講座	津幡町地域包括支援センター	3
39	教授 牧野 智恵	H23.10.2 10:00～16:00	しいのき迎賓館	ホスピス緩和ケア週間記念イベント	県在宅緩和ケア支援センター	5
40	講師 藤田 三恵	H23.10.29 13:30～14:35	県地場産業振興センター	石川県看護学会	県看護協会	2
41	教授 西村 真実子	H23.11.15 H23.11.16	金沢都ホテル	中部地区相談員・臨床心理士合同研修会	中部地区児童家庭支援センター	2 2

No.	派遣講師	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類
42	講師 彦 聖美	H23.8.24 13:00 ~ 16:40	芳珠記念病院	看護研究講評	芳珠記念病院	1
43	教授 川島 和代	H23.9.20 10:00 ~ 12:00	石川県立看護大学	介護実習指導	県立盲学校	4
44	講師 米田 昌代	H23.10.6 10:30 ~ 12:00	金沢都ホテル	周産期のグリーンケアについて	日本助産師会東海・北陸地区研修会	2
45	准教授 北山 幸枝	H23.9.14 12:30 ~ 14:30	金沢桜丘高等学校	学部学科説明会	金沢桜丘高等学校	4
46	教授 武山 雅志	H23.9.6 13:30 ~ 15:00	石川県庁	平成23年度市町犯罪被害者等支援担当者研修会	県県民生活課	3
47	教授 武山 雅志	H23.9.20 13:30 ~ 15:00	県警察本部	被害少年カウンセリングアドバイザー研修会	県警察本部生活安全部少年課	3
48	教授 武山 雅志	H23.9.20 13:30 ~ 15:00	南加賀保健福祉センター	自殺防止対策地域連絡会及び自殺防止対策研修会	南加賀保健所	3
49	教授 武山 雅志	H23.10.18 13:30 ~	県女性センター	(財)いしかわ女性基金運営委員会	(財)いしかわ女性基金	3
50	教授 武山 雅志	H23.10.22 13:00 ~ 17:00	恵寿総合病院	チームアプローチにおけるコミュニケーション技法の実際	県医療ソーシャルワーカー協会	2
51	学長 石垣 和子	H23.11.6 9:30 ~ 16:40	県リハビリテーションセンター	在宅療養者における医療連携:看護師の立場から	県作業療法士会	2
52	講師 川村 みどり	H23.11.12 13:30 ~ 16:30	石川県立看護大学	石川県支部看護研究発表	日本精神科看護技術協会石川県支部	2
53	准教授 山岸 映子	H23.11.28 9:00 ~ 10:30	日本航空高等学校石川	エイズ講演会	能登北部保健福祉センター	3
54	教授 林 一美	H23.11.23 8:00 ~ 13:00	加賀市 老健施設「日々好日院」他	県防災総合訓練	石川県看護協会	2
55	教授 武山 雅志	H23.10.18 15:50 ~ 17:10	県警察学校	相談業務のあり方	県警察本部県民支援相談課	3
55	教授 武山 雅志	H23.11.21 13:30 ~ 16:30	県地場産業振興センター	「犯罪被害者週間」国民のつどい石川大会	県県民文化局県民生活課	3
56	准教授 垣花 渉	H23.11.2 14:00 ~ 16:30	七尾市立御祓中学校	食育講演会	七尾市立御祓中学校	4
57	教授 高山 成子	H23.11.18 17:30 ~ 19:00 ②H23.12.13	公立つるぎ病院	「高齢者の看護」について	公立つるぎ病院	1 1
58	教授 牧野 智恵	H23.10.30 10:00 ~ 11:45	県文教会館	ターミナルケア	メンタルヘルス協会	2
59	講師 中道 淳子	H23.11.21 15:00 ~ 16:30	金沢市駅西福祉健康センター	認知症高齢者を支える地域づくり	金沢市駅西お年寄り福祉支援センター	3
60	教授 丸岡 直子	H23.12.1 17:30 ~ 19:00	公立羽咋病院	「チーム医療としての退院支援」多職種役割分担と連携方法	公立羽咋病院	1
61	教授 川島 和代	H24.2.24 19:00 ~ 20:30	金城大学社会福祉学部棟	介護福祉会ブロック研修会	石川県介護福祉会白山野々市ブロック	2
62	教授 武山 雅志	H23.12.7 13:20 ~ 16:00	県地場産業振興センター	傾聴ボランティア研究交流会	石川県社会福祉協議会	5
63	教授 林 一美	H23.12.13 15:20 ~ 16:15	金沢伏見高等学校	1学年進路ガイダンス	金沢伏見高等学校	4
64	教授 川島 和代	H23.12.6 15:30 ~ 17:00	石川県立看護大学	介護職員等によるたんの吸引等の実施のための研修における教員の企画委員会	石川県社会福祉協議会	2
65	教授 西村 真実子	H23.12.16 18:30 ~ 20:45	石川県文教会館	養成セミナー(子供の問題「虐待など」)	社団法人金沢こころの電話	5
66	教授 林 一美	H24.1	公立羽咋病院	「家族看護論」退院支援に必要なアセスメント能力を高めるために	公立羽咋病院	1
67	講師 彦 聖美	H23.12.21 13:30 ~ 18:00	芳珠記念病院	看護研究講評	芳珠記念病院	1
68	教授 川島 和代	H24.1.31 9:40 ~ 12:10	福祉総合研修センター	認知症の基本的理解とケアのあり方	福祉総合研修センター	5
69	講師 中道 淳子	H24.1.17 17:30 ~ 19:30	公立つるぎ病院	「高齢者看護」について	公立つるぎ病院	1
70	教授 武山 雅志	H23.11.19 13:00 ~ 16:00	津幡町福祉センター	生活・介護支援サポーター養成講座	津幡町社会福祉協議会	5
71	教授 牧野 智恵	H24.3.9 10:30 ~ 12:00	金沢大学附属病院	「がん患者の心のケア」について	金沢大学附属病院	1

No.	派遣講師	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類
72	講師 堅田 智香子	H24.2.14 10:00～12:30	こども家庭支援センター 金沢	親育ち支援プログラム Nobody's Perfect 完璧な親なんていない！	こども家庭支援センター 金沢	5
		H24.2.21②				5
		H24.2.28③				5
		H24.3.7②				5
		H24.3.14③				5
H24.3.21③	5					
73	講師 中田 弘子	H24.2.6 13:30～16:30	石川県社会福祉協議 会福祉総合研修センター	介護職のためのアサーション トレーニング	石川県介護福祉士会	2
74	講師 彦 聖美	H24.2.8 13:00～17:00	芳珠記念病院	看護研究講評	芳珠記念病院	1
75	教授 川島 和代	H24.2.4 8:30～12:30	公立能登総合病院	看護研究発表講評	公立能登総合病院	1
76	教授 武山 雅志	H24.2.7 9:10～12:00	かほく市七塚健康福祉 センター	お話を聴くことの基本につい て	かほく市社会福祉協議 会	5
77	教授 川島 和代	H24.2.23 19:00～19:40	かほく市高松北庁舎	いつまでも、からだもこころも 健やかに生きるために	高松ライオンズクラブ	5
78	教授 川島 和代	H24.2.19 13:30～16:00	津幡町福祉センター	津幡町認知症フォーラム	津幡町地域包括支援セ ンター	3
79	准教授 塚田 久恵	H24.3.16 14:00～15:30	能美市健康福祉セン ター	能美市介護予防事業評価事 業会議	能美市健康福祉部介護 長寿課	3
	講師 中道 淳子					
80	教授 武山 雅志	H24.3.1 15:30～16:45	かほく市役所七塚庁舎	不登校問題対応運営協議会	かほく市教育委員会	3
81	講師 米田 昌代	H24.3.22 17:00～20:30	南加賀保健福祉セン ター	妊娠期・周産期におけるグ リーフケア連絡会及び研修会	南加賀保健福祉セン ター	3

1-2-2 病院への事例・看護活動・研究等の指導助言実施状況（再掲）

地区別	派遣病院名	指導内容	講師名	回数
加賀地区	能美市立病院	看護研究指導	教授 村井 嘉子	1
		看護師に求められる判断力	講師 藤田 三恵	1
	芳珠記念病院	看護研究講評	講師 彦 聖美	3
	公立つるぎ病院	高齢者の看護について	教授 高山 成子	2
		高齢者看護について	講師 中道 淳子	1
		看護研究指導	講師 川村 みどり	5
金沢地区	浅ノ川総合病院	看護研究指導・講評	助教 田甫 久美子	4
	金沢社会保険病院	「ナラティブ」とは	教授 牧野 智恵	1
	金沢大学附属病院	「がん患者の心のケア」について	教授 牧野 智恵	1
能登地区	珠洲市総合病院	看護研究指導・講評	教授 村井 嘉子	3
	公立宇出津総合病院	看護研究指導	教授 川島 和代	5
	志雄病院	ケーススタディについて学ぶ	助教 東 雅代	4
	公立羽咋病院	「チーム医療としての退院支援」 多職種の役割分担と連携方法	教授 丸岡 直子	1
		事例検討会	講師 藤田 三恵	4
		「家族看護論」退院支援に必要な アセスメント能力を高めるために	教授 林 一美	1
公立能登総合病院	看護研究発表講評	教授 川島 和代	1	

2 指 導 助 言

2-1 高齢者ケア事例検討会

1. 事例検討会の趣旨

県内の高齢者ケアの質の向上を高めるために、ケアの専門家としての実践能力を育成・向上する継続的な学習の場とする。また、実践と教育・研究の連携の場としての有用性をはかる。

2. 資料の取り扱いについて

- * 個人のプライバシーを侵害しない
- * 個人の責任において資料を安全に保管する。不要になった時は、シュレッダー処理する。
- * 資料を他に活用する場合は、事例提供者の了解を得る。
- * 資料に関しては、個人が倫理的な責任を負う。

3. 実施状況

回	月 日	テーマ	参加人数
第 67 回	平成 23 年 4 月 13 日 (水)	「パーキンソン病高齢者への主体的リズム形成を用いた 摂食・嚥下機能介入の効果」 「長期経管栄養高齢者の常時開口改善の取り組み —一口輪筋・頬筋のマッサージを試みて—」 【修了生研究発表】	14 名
第 68 回	5 月 11 日 (水)	慢性心不全を伴う重度認知症高齢者の安全な経口摂 取に向けて活動耐性を高め表現性を引き出す看護	19 名
第 69 回	6 月 8 日 (水)	ターミナル期の患者に対する清潔ケアの検討	16 名
第 70 回	7 月 13 日 (水)	老人保健施設での看護の現状、看護のあり方について 考える	13 名
第 71 回	9 月 14 日 (水)	急激な体重減少による中等度栄養障害がある認知症 高齢者への食事への関わりと、家族支援	18 名
第 72 回	10 月 12 日 (水)	焦燥、多動で薬物療法をうける認知症高齢者の看護の あり方	15 名
第 73 回	11 月 16 日 (水)	発熱による BPSD (特に夜間せん妄、大声、不穏) が悪 化したケース	17 名
第 74 回	12 月 7 日 (水)	大脳基底核変性症利用者へ音リズムを用いた歩行練 習の関わり	10 名
第 75 回	平成 24 年 2 月 9 日 (水)	「大腿骨転子部骨折高齢者の術後早期移動における疼痛 軽減の試み」 「急性期一般病床のスタッフステーションで看護を受け ている高齢患者のメッセージ」 【大学院生研究発表】	8 名
第 76 回	3 月 14 日 (水)	高齢者が食べられなくなったとき—看護師の役割—	13 名

参加者：看護師対象（石川県内の高齢者ケアに関わる看護師、本学大学院生修了生、大学院生、
在学生、老年看護学教員、施設管理者）

4. 事例検討会参加者の評価（アンケートより一部抜粋）

- * 具体的な意見が聞けて病棟での実践に活かせる。
- * 具体的な対処方法が聞けて参考になった。
- * 自分に不足していた考え方や見方をみつめることができる。実践に活かしてゆける。

5. 事例検討会の成果

老健施設からの参加者もあり、多施設間での情報交換ができた。認定看護師が継続して参加しており、CNS と併せて専門家からの意見や病棟師長などの参加もあり、管理者の立場からの意見などディスカッションがさらに深まり、参加者の刺激になっている。さらに検討会での意見を臨床に持ち帰り、スタッフと共有することで臨床看護の質の向上につながっている。また、大学院生も参加し、実習での事例や研究を発表することで、大学側と臨床側の双方で学びの場となっている。

2-2 ペリネイタル・グリーンケア検討会 ～周産期の死のケアの充実をはかるために～

事業の目的： 県内の周産期の死に関わっている看護職がケアの現状を話し合い、互いに情報交換したり、体験者の思いを聞いたり、教員等からの新しい情報を得ることによって、臨床での周産期のケアの充実をはかる。

目 標： 第5回「看護者であり、体験者である人の体験談を聞こう」：看護者であり、体験者でもある方からの体験談を通して、今後の看護に活かせることや課題について考えることができる。
第6回「退院後の支援のあり方について考えよう」：各施設の退院後の支援の現状について情報交換し、今後、退院後の支援はどうあるべきかについて考えることができる。

実施状況：

開催日時： 第5回：H23. 7. 12（火）13:30～16:00

第6回：H24. 2. 14（火）13:30～16:00

実施場所： 石川県立中央病院 健康教育館 2F 大研修室

講 師： 米田昌代、吉田和枝、曾山小織

協力：尾井せつ子、桶作梢、工藤淳子（石川県立中央病院）、森田智恵（金沢大学附属病院）
北濱まさみ、水口真里（金沢医科大学病院）、河村淳子（まなぶクリニック）

参加者： 第5回：30名（産科・NICUに勤務する助産師・看護師29名 保健師1名）

第6回：28名（産科・NICUに勤務する助産師・看護師26名 保健師1名 臨床心理士1名）

実施内容：

第5回：看護者であり、体験者である人の体験談を聞こう

看護者であり、体験者である方2名からの体験談を聞いた後に、グループに分かれて（6人×5グループ）、施設間の情報交換を含め、体験談を聞いての感想、今後の看護に活かすべきこと、活かせること、今後の課題として考えられること、ケア検討会で今後取り組んでいくべき事等について話し合った。話し合いの結果をグループ毎に発表し、全体で共有した。話し合いの結果、話を聴く、寄り添うことの大切さ、夫へのフォローの大切さ、具体的ケア方法等について挙げられた。

第6回：退院後の支援のあり方について考えよう

各施設の退院後の支援の現状について、全体で共有後、グループに分かれて（5～6人×5グループ）、今後の退院後の支援はどうあるべきか、現在、支援の妨げとなっていること、支援を実現するための具体的対応策について話し合った。話し合いの結果をグループ毎に発表し、全体で共有した。話し合いの結果、施設での退院後の相談窓口のシステム化、施設・地域で情報が共有できるシステム作り（地域との密な連絡体制の整備）、社会全体で対象のニーズに添った関わりができるようなシステム作りの必要性等が挙げられた。

評価と今後の課題：

第5回：看護者であり、体験者である人の体験談を聞こう

体験者の体験談を聞くというのは、アンケートの結果にも表れているように、大きな学びにつながったようであった。今回は体験者でもあるが、看護者でもあるということから、自分の体験をどのように現在のケアに活かしているかということも聞けたため、実際のケアに活かしやすい内容であったと考えられる。グループワークでは、施設間の情報交換の場にもなっているようで、今後活かせるアドバイスももらえているようであった。

第6回：退院後の支援のあり方について考えよう

これまでのケア検討会の話し合いの経過から、あまり進んでいないと考えられる退院後の支援について話

し合う場を企画した。退院後の支援が十分行われているという施設はない現状であるが、今後、少しでもケアを発展させていくためにはどうしたらよいか考えるきっかけになったのではないかと考えられる。今回は1名の保健師さんが参加してくださったが、今後はより多くの保健師さん等も交え、具体的な連携のあり方について考えていく必要があると考えられる。

昨年度から依頼したケア検討会の企画委員は積極的に検討会の内容について考えてくださっており、会の運営にも関与していただいている。今後も継続して関わっていただく予定である。

今後は昨年度からの課題であるグリーンケアに取り組み始めた施設と、より一層充実させたい施設間の温度差をいかにうめていくかについて考えていかなければならない。また、産科とNICUでのケアの質の違いもあるため、その違いも考慮して企画を進めなければならない。より具体的なケア方法の紹介等を望む声もあるため、施設に事例提供を依頼し、検討していくといった企画も今後考えていく必要があると考える。

2-3 親育ち支援プログラム

「ノーバディーズ・パーフェクト完璧な親なんていない」プログラム

実施目的：

1. 悩みや気持ちを表現し、分かち合うこと・違いを認めること
2. エンパワメント
3. 自己の考え方や感じ方に気づき、吟味する
4. 自分に合った子育てのやり方、あるいは自分の長所を見つける

実施状況

開催日・開催場所・取り扱ったテーマ・参加人数：

回数	開催日	開催場所	テーマ	人数
第1回	8月31日	本学センター研修室	お互いを知る	4名
第2回	9月7日	本学センター談話室	感情をコントロールするにはどうしたらいいか	4名
第3回	9月14日	本学センター談話室	夫との関わり方・ママ友の作り方・付き合い方	4名
第4回	9月21日	本学センター談話室	ママ友の作り方・付き合い方、子どものしつけ	4名
第5回	9月28日	本学センター談話室	リフレッシュの方法、自分の育児と社会のギャップ	3名
第6回	10月5日	本学センター談話室	これまでのセッション体験の振り返り・まとめ	4名

ファシリテーター：堅田智香子 曾山 小織

評価と今後の課題：

ねらい①悩みや気持ちを表現し、分かち合うこと・違いを認めること

「みんなと話せることでリラックスできる」「みんなに聞いてもらえるだけで気持ちが楽になる」「みんなも同じように悩んでいるんだ」という言動がみられ、回を重ねる毎にサポート的な関係性ができたとと言える。

ねらい②エンパワメント

「話すことによって、元気になれた」という言動や「自分が頑張りすぎていたことに気づいた」等自分を認める言動がみられるとともに、自分のこれまでの育児に対して、肯定的にとらえる言動や今後の子育てに取り入れたい手法や考え方についての言動が伺えた。

ねらい③自分の考え方や感じ方に気づき吟味する

「子どもに優しく接しようと思えるようになった」「人の話を聞くことによってイライラの理由がわかった」「日々流れていたことが、立ち止まってこうしてみよう、あーしてみよう考えるようになった」と自分の行動を振り返れる機会となり、育児不安・困難・ストレスの軽減につながったと言える。

ねらい④自分に合った子育てのやり方や、あるいは自分の長所を見つける

日頃の思いや経験を語り合うことを通して、他者のいろいろな意見に触れ、自分との違いを感じ、考え方の幅が広がっていた。

今後の課題

子ども抜きで深い話ができる場はとても貴重な場であるといえる。NP終了後は自分達で定期的に話し合う機会をもち、グループが継続出来ればと考えるが、継続が難しい場合もある。今後は2～3ヶ月毎に3回の再会プログラムを実施し、お互いにサポートし合えるネットワークづくりを支援していきたい。

2-4 子育て どろっぷ・イン・さろん

目的

これまで子育て中の母親に対して行ってきた NP (Nobody's Perfect) プログラムの評価や、ニーズ調査の結果により、次の 2 点の支援の必要性が明らかになった。1 つ目は、母親が子どもと離れて一人で過ごす場所を提供することであり、2 点目は、これまでの NP グループの枠組みを越えて新たに集まり、テーマを決めて話し合う場をもつことである。

本事業の目的は、前者を「どろっぷ・イン・るーむ」、後者を「NP 親育ち・子育てを考える会」と称して、育児不安や困難に悩む母親を支援することである。

実施状況

対象者: どろっぷ・イン・るーむ 子育て中の母親

NP 親育ち・子育てを考える会 NP プログラムに参加経験のある子育て中の母親

開催場所: ひだまりの家助産院

開催日時と参加人数・話し合われたテーマ

1) どろっぷ・イン・るーむ

回数	開催日	時間	参加人数
第 1 回	H23.6.29 (水)	10:00~12:00	3 名
第 2 回	H23.7.27 (水)	10:00~12:00	6 名
第 3 回	H23.8.31 (水)	10:00~12:00	8 名
第 4 回	H23.9.21 (水)	10:00~12:00	6 名
第 5 回	H23.10.12 (水)	10:00~12:00	6 名
第 6 回	H23.11.16 (水)	10:00~12:00	7 名
第 7 回	H24.2.8 (水)	10:00~12:00	5 名
第 8 回	H24.2.24 (金)	10:00~12:00	3 名
第 9 回	H24.3.16 (金)	10:00~12:00	3 名

2) NP 親育ち・子育てを考える会

①グループ花

回数	日時	主なテーマ	参加人数
第 1 回	H23.6.29 (水) 13:00~15:00	こどものイヤイヤへの対応	5 名
第 2 回	H23.7.27 (水) 13:00~15:00	子どもがしなければならないことよりしたことを優先させるにはどう対応するか	6 名
第 3 回	H23.8.31 (水) 13:00~15:00	小学生の宿題のさせ方、夫へのイライラ	6 名

②グループ海

回数	日時	主なテーマ	参加人数
第1回	H23.9.21 (水) 13:00～15:00	イライラする状況、上の子への対応、寝かしつけ、子どもが謝れないときの怒り方、子どもとの関係	9名
第2回	H23.10.12 (水) 13:00～15:00	夫・姑との関係	10名
第3回	H23.11.16 (水) 13:00～15:00	イライラの対応について(自分の好きなことをみつける)、子どもがかわいと思えないことについて	8名

③グループ空

回数	日時	主なテーマ	参加人数
第1回	H24.2.8 (水) 10:00～12:00	子どもがやって欲しいことをやってくれない、やって欲しくないことをする時、どう対応するか	7名
第2回	H24.2.24 (金) 10:00～12:00	カッとなった時の対応、イライラしないための対処方法	6名
第3回	H24.3.16 (金) 10:00～12:00	子どもの欲求にどこまで応えるか(小学生になってからの生活)	4名

④グループ雪

回数	日時	主なテーマ	参加人数
第1回	H24.2.8 (水) 13:00～15:00	イライラへの対処	6名
第2回	H24.2.24 (金) 13:00～15:00	きょうだいへの対応、夫婦喧嘩を子どもに見せてよいか、イライラについて	5名
第3回	H24.3.16 (金) 13:00～15:00	保育園(幼稚園)であったことを子どもに聞くか、長時間子どもと過ごす必要がある時の過ごし方、自分を大切にしているか	7名

全てのグループのファシリテーター：米田昌代

評価と今後の課題

どろっぷ・イン・るーむについては、アンケート結果より、「子育てに新たな気持ちで頑張ろうと思った」「心にゆとりができ、ふっと張りつめたものがなくなり楽になった」「他の母と意見交換ができた」などの意見を得、ゆったりとした時間を持つことで育児に前向きな気持ちになれた母親が多かった。NP 親育ち・子育てを考える会は、プログラム中の言動やアンケートの内容から、回を重ねる毎にお互いの個性を認めつつ、サポート的な関係が出来てきた。また、自分を認める言動や今後の子育てについて用いたい手法や考え方についての言動が伺えた。参加前後で、ベックのうつ尺度得点が有意に低下した。

2つの支援の有用性は確認できたが、考える会の参加者で育児困難感が悪化した人もおり、セッションで参加者間に負の相互作用がないか細心の注意を払い、ファシリテーションを工夫するとともに、新たな仲間作りを促進するために、セッションの回数やアクティビティなど検討していく必要がある。

2-5 孫育ては家族にとって大きな力 ～祖父母の楽しい上手な孫育て教室～

事業の目的：現在の子育て事情（育児方法や考え方）の情報を取り入れながら孫育てに関する理解を深める。
若夫婦のよき援助者として、また祖父母自身が楽しみながら、適切な孫育児ができる。

- 目 標：**
1. 日ごろ、孫育てに関する悩みや疑問を参加者全体で話し合うことにより、参加者同士の交流を図り、気持ちを軽くしたりして経験の共有をはかる。
 2. 他の参加者と話しあいやアドバイスの交換等により多角的な見方を知り、各人が良いと思える方法を考えることができる。
 3. いまどきの孫育て、子育て、若夫婦等に対する付き合い方等の情報の入手をおこなう。

実施状況：

開催日時：平成23年10月2日（土）13時30分～16時00分

実施場所：石川県女性センター 2階 研修室3

講師：吉田和枝、米田昌代、曾山小織、北濱まさみ（金沢医科大学病院）、尾井せつ子（石川県立中央病院）

参加者：地域住民（0-3歳の孫をもつ祖父母）21名

実施内容：

参加者のプライバシーを守るため事前に準備した（花の名前の）名札を置き、お互いに花の名前で呼び合うこと、個人情報を出さないように説明し了解しあいを行った。今回は参加者が多かったため、2グループに分かれ実施した。各参加者の自己紹介に続いて参加者が問題提起した内容（孫との接し方、最近の子育て、嫁との付き合い方等）について話し合った。今年度は昨年、研修で参加していた臨床助産師2名にもファシリテーターとして参加していただき、進行した。臨床助産師と教員は各参加者の意見を全体の話題となるように進行し、子育て・孫育ての新しい情報を提供し説明も行った。また、参加者やその家族の参考になるように『楽しい孫育てに関するパンフレット』を事前に作成し配布した。孫の危険防止のためにビデオ上映も行った。最後に本教室に関するアンケート調査を行った。

評価と今後の課題：

開催地はかほく市住民の参加が少ないため前年度同様に金沢市で企画した。かほく市住民の参加も期待して広報かほくで募集したが応募が少なく（1名）、広報いしかわで再募集して定員を満たした。応募者は21名で当日3名欠席（1名のみ連絡あり）したが、応募締切日を過ぎた教室開催前日に申し込んだが参加可否の連絡がなかったと当日3名来られ、最終的に21名参加した（夫婦での参加3組）。広報いしかわでの募集は効果的であったため、来年度も利用することとする。当初計画していた部屋は1グループ用であったため、会場のスペースが少し狭かった。今後、応募状況や「開催場所が地区ごとにあるといいかもしれない」という意見もふまえ、開催回数、会場、募集定員について検討していく必要があると考える。

教室は参加者同士の情報交換によりグループ・ダイナミクスが生じ、全体的に楽しい雰囲気できれいに話し合えた。アンケート結果では、教室全体を通して良かった、役に立ったと答えた人が90%以上であった。役に立ったこととして、「他の方の具体的な話を聞くことで参考になることがたくさんあった」「危険防止について」「自分が子育てしてきた時とは違うことが認識できた」等が自由記載欄に挙げられていた。進め方・開催時間の長さについては85%以上が問題ないと回答していた。開催曜日の希望は土曜日か日曜日かわかれたが、午後に希望する人が多かったため、引き続き土曜日か日曜日の午後に開催していきたいと考える。その他の自由記載としては、「娘の孫と息子の孫のグループに分かれたら違う意見が聞けたかもしれない」「現役の子育て父母と祖父母で悩みやかかわりなどを話し合う会もおもしろいのではないか」等対象者の背景に合ったグループ分けや父母も交えた教室の運営を考慮する必要があると考える。

2-6 赤ちゃんをお空へみ送った方の自助グループに対するサポート活動

事業の目的： あかちゃんを亡くした方がアクセスしやすいような体制作りとお話会を開催しあかちゃんを亡くした方の自助グループ活動を支援する。

目 標： 1. 毎月1回は4つの自助グループのいずれかでお話会が開催できるように運営をサポートする。
2. 体験者、臨床、地域からの相談があった場合、4つの自助グループのネットワークを通じて対応できる。

実施状況：

・SIDS テキストセミナー開催

H23. 6. 26 (日) 13:30~16:30 場所：石川県立看護大学 研修室 主催：SIDS 家族の会

参加者 産科・NICUで勤務する臨床助産師・看護師 16名 学生(米田ゼミ) 4名

・エンジェル・ハグ(グリーフケアを学ぶ会)開催

H23. 9. 5 (月) 10:00~12:00 講師 米田昌代 場所：津幡町 庁議室 主催：小さな天使のママの会

参加者 小さな天使のママの会メンバー 6名

・お話会開催 日時・場所・参加人数

対象：あかちゃん(流産・死産・新生児死亡・乳児死亡等)であかちゃんを亡くした方

回数	月日	時間	主催	場所	人数
第1回	H23. 4. 17(日)	13:30~16:00	天使のゆりかご&SIDS 家族の会	SIDS 北陸支部事務局(富山県)	4名
第2回	H23. 4. 24(月)	13:30~16:00	ひまわりの会	石川県NPO活動支援センター「あいむ」	6名
第3回	H23. 6. 6(月)	10:00~12:00	小さな天使のママの会	津幡町役場 庁議室	9名
第4回	H23. 7. 17(日)	13:30~16:00	天使のゆりかご&SIDS 家族の会	SIDS 北陸支部事務局(富山県)	3名
第5回	H23. 7. 24(日)	13:30~16:00	ひまわりの会	石川県四高記念文化交流館	8名
第6回	H23. 10. 3(月)	10:00~12:00	小さな天使のママの会	津幡町役場 庁議室	9名
第7回	H23. 10. 23(日)	13:30~16:00	ひまわりの会	石川県NPO活動支援センター「あいむ」	6名
第8回	H24. 1. 22(日)	13:30~16:00	ひまわりの会	近江町交流プラザ	7名
第9回	H24. 2. 6(月)	10:00~12:00	小さな天使のママの会	津幡町役場 庁議室	14名

・適宜メール相談・面談

窓 口：米田昌代(石川県立看護大学・天使のゆりかご)

自助グループ代表:安田文子(ひまわりの会) 太田友美(天使のゆりかご) 丹保美枝(SIDS 家族の会北陸支部) 村中智恵・泉早苗(小さな天使のママの会)

実施内容：

広報活動：昨年度、ひまわりの会と協力として作成したちらしは助産師会の講演時、グリーフケア検討会等で配布させていただいた。

SIDS テキストセミナーの開催：SIDS 家族の会(体験者)の作成したテキストにそって、体験者の生の声によるセミナーを開催した。このセミナーは、SIDS 家族の会からの依頼であり、今後テキスト販売、セミナー実施を全国展開していく上での参加者へのアンケート調査の目的もあった。

エンジェル・ハグ(グリーフケアを学ぶ会)の開催：昨年、小さな天使のママの会の参加者から、グリーフケアについて学び、今後遺族と関わる際の参考にしたいという希望があり、今年度1回実施した。

お話会の開催：ひまわりの会は3ヶ月に1回（1・4・7・10月の第4日曜日）、小さな天使のママの会は4ヶ月に1回（2・6・10月の第1月曜日）予定通り開催し、SIDS 家族の会と天使のゆりかごは4月と7月に合同により富山でお話会を開催した。お話会の参加に関しては、今年度は新規参加者はひまわりの会3名、小さな天使のママの会3名であった。第9回の津幡町でのお話会では、新規参加者、その家族、医療者の相談者を含め、最大14名の参加がみられ、食事を交えて交流をはかった。

個別相談：メールでの相談は前年度から継続している1名は現在妊娠中であり、妊娠中の不安についての相談を受けていたが現在しばらくメールがない状態である。新規2名は自助グループにつなぎ、現在メール相談は継続していない。

評価と今後の課題：

広報活動：県内の産科施設に関しては、自助グループの存在は周知されてきており、退院時に紹介がなされていると考えられる。実際、産科クリニックからの紹介があり、メール相談、体験者への橋渡しを実施した。講演依頼もあり、グリーフケアに対する関心は高まってきていると考えられる。震災の影響もあり、県内に被災している遺族がいるのではないかとひまわりの会は待機していたが、震災遺族からの連絡はなかった。

来年度はこれまでであったひまわりの会とともに、小さな天使のママの会もホームページを立ち上げていくので、講座のホームページともリンクさせ、充実させていきたい。

SIDS テキストセミナーの開催：体験者からの生の声によるセミナーであり、医療者が実施するセミナーとは違い、特に心に響く内容であったと考えられる。SIDS 家族の会の事業に対するサポートとともに、両者にとって有意義であった。

エンジェル・ハグ（グリーフケアを学ぶ会）の開催：今後の相談者対応のために活かすことができる内容であるとともに、体験者自身、自分の体験を振り返る場ともなったため、好評であった。今後も継続し、来年度はグループの代表を中心に企画していきたいと考えている。

お話会の開催：今年度は昨年度と同様、年9回開催できた。SIDS 家族の会、天使のゆりかごは代表の都合もあり、今年度は回数も少なく、開催月を他の自助グループの間をぬって設定することができなかつたのが反省点である。新規の参加者が少数であるのは地域特性もあるのかもしれない。アクセスがあった場合はまず、十分個別に関わり、本人のニーズに合わせて、個別対応も選択肢の中を含め、自助グループへの参加を勧めていくこととする。

個別相談・体験者への橋渡し：自助グループ参加よりも、メールでの対応を求める体験者もいるため、上記同様体験者のニーズにそって関わっていくこととする。顔がみえない、一方的なやりとりになりがちであるため、十分注意をはらいながら対応していく。連絡が途絶えたときの対応については考えていく必要がある。

2-7 医療英語セミナー

人間科学領域講師 野村 潤
健康科学講座教授 多久和典子

平成 22 年 9 月に、初めて「医療英語を始めてみよう」と題したセミナーを 4 回シリーズで行いました。その前年に、英国で看護師として勤務した経験のある本学学生（卒業生）と、石川県における外国人医療について調査した結果、石川県に暮らす外国人が県民の 100 人に 1 人にのぼり、医療の現場で外国人患者と接する機会も多いことが分かったからです¹⁾。自作の外来場面のダイアログを作ってロールプレイを行ったり、市販品の CD のシャドウイングなどをとりまぜ、英語・日本語対訳の症状表現の短文集や多言語問診票などをハンドアウトし、参加者に好評を戴きました。

この経験をふまえ、平成 23 年度の医療英語セミナーは、本学の英語の専任教員である人間科学領域の野村 潤講師のご協力をいただき、さらにパワーアップして開催することが出来ました。6 月の土曜日の午後、4 回にわたり、看護師・一般市民・本学学生を含む、のべ 40 名の方々に参加いただきました。前半の 2 回を野村講師が、後半 2 回を多久和が担当しました。前半は、まず参加者がペアを組み、例文にそって英語でお互いに自己紹介しあい、簡単な質問をしたり、ペアの相手を他のメンバーに紹介したりすることで英会話のウォーミングアップを図りました。次いで、困った時の英語表現や、外来でよく話される会話文、さまざまな症状の英語表現について学べるようなプログラムが実施されました。後半は、米国で医療通訳の経験のある本学 3 年生に **teaching assistant** を務めていただき、症状から病気を言い当てるクイズや、テキストには無い、アメリカの現代っ子の症状の訴え方などを楽しく学びました。

しかしながら、ローマは 1 日にして成らず。使える英語を身につけるにはセミナーの 6 時間ではとても足りません。このセミナーをきっかけに、医療英語への興味を持ち続け、一人一人が継続して学び続けることが重要となります。また、受診する外国人は英語が出来るとは限りません。インターネットからダウンロードできる多言語問診票を常備しておくことも診療の大きな助けとなることでしょう²⁾。セミナー終了時のアンケートでは、日常診療において医師が診療記録に書く専門用語が分かるようになりたいという希望もあり、医療英会話にかぎらず、さまざまなニーズを調査し、これらに応えられるプログラムを年度ごとに交代で提供することも検討が必要ではないかと思われました。

(文責 多久和)

[参考文献・資料]

1) 中川恵子, 多久和典子, 地域における外国人医療の現在と今後への展望— 医療機関を対象とした調査から — 石川看護雑誌 9:23-32, 2012

2) 1992年に設立されたNPO法人『国際交流ハーティ港南台』(International Community Hearty Konandai)は, 無料でダウンロードが可能な, 17言語(英語, 中国語, ハンデル版, スペイン語, ポルトガル語, タイ語, ペルシャ語, インドネシア語, ベトナム語, タガログ語, ロシア語, ラオス語, カンボジア語, フランス語, ドイツ語, アラビア語, クロアチア語)で10診療各科(内科, 小児科, 外科, 整形外科, 皮膚科, 脳神経外科, 産婦人科, 耳鼻咽喉科, 眼科, 歯科)対応の多言語医療問診票を同法人HP

<http://www.mmjp.or.jp/konan-international-lounge/jmonshin/top.htm>, および, 神奈川県国際交流協会HP <http://www.k-i-a.or.jp/medical/> から公開している。いずれも自己責任において活用することが条件とされている。

また, 1991年発足のNPO法人『AMDA国際医療情報センター』
http://amda-imic.com/modules/activity/index.php?content_id=13 では, 無料でダウンロードできる多言語問診票に加えて, 8ヶ国語対応の医療通訳による電話相談を東京・関西の2箇所のセンターで受け付けている。電話番号ならびに電話対応時間帯はHPに公開されている。

2-8 赤ちゃん触れ合い体験

実施目的：

1. 看護大学の学生が乳幼児とふれあう経験をもつことを通して、乳幼児の発達や関わり方、さらに親への関わり方や支援について理解を深める。

実施状況：

開催日時：平成 23 年 9 月 9 日（水）10:00～12:30

開催場所：本学母性・小児看護実習室（ふれあい体験場所）

講師：本学母性・小児看護学講座教員 3名 保育士 2名

参加者：4ヶ月～1歳7ヶ月の乳幼児（3名）とその母親（3名）
本学学生（2～4年生） 3名

実施内容：

最初は参加者全員が実習室に集まり、担当する学生と乳幼児、母親とのふれあいの場を設けた。母親から日頃の乳幼児の様子や好み、あやし方などの情報を得たり、乳児に触れるなどで子どもに少し慣れたところで、母親は別室に移動した。（地域ケアNP3回目）。保育士、教員が見守る中、学生は乳幼児と抱っこやあやす等のふれあい体験をした。また、保育士から児の特性やあやし方など乳幼児の発達や関わり方について、実践を混じえながら話しを聞いた。最後に再度、参加者全員が実習室に集まり、学生は乳幼児の様子を母親に伝え、母親から日頃の乳幼児の様子や育児についての思いなどを母親の思いを聞くことができた。

評価と今後の課題：

アンケートの結果、参加学生（配付3名 回収3名：回収率100%）より赤ちゃんとの交流は全員が非常に良かったと回答している。具体的な触れ合いとしてはおもちゃ等で発達に合わせてあやすや遊ぶ、抱っこ、おむつ交換などであった。母親との交流は2名がまあまあ良かったと回答し、母親との交流では赤ちゃんの普段の様子（遊び、過ごし方、嗜好など）など聞く機会となり、乳幼児との関わりに生かすことができた。今回は母親との交流する時間が短く、育児に関する母親の思いを聞く時間を延長してほしいと望む学生もいた。乳幼児とのふれ合う時間が2時間30分という長い時間であったが、乳幼児との触れ合いを通して、「泣きながらも自分を頼って抱きついてきてくれた」などの喜びを感じ、母親の存在の大きさを実感している学生もいた。

また、他児との比較からほとんどの学生が月齢による成長発達の違い、関わり方の違いを実感できていた。

今回の事業は地域ケアで開催されている親育ち支援プログラム（NP）に参加している母親のうち託児希望の母親3名とその乳幼児、学生を対象としたものであった。NP3回目であり、託児を担当して頂いた保育士も乳幼児の特性を知った上で学生の支援をして頂けた。あやすや遊ぶなど実際の場面においても児の特性を踏まえて説明しながら関わって頂いたので学生も理解しやすかったと言える。また、協力頂いた母親は学生の触れ合い体験を快く引き受けて頂き、参加学生全員が満足できる事業であった。同様の企画があれば、参加を希望する学生もいた。

2-9 プレママ・プレパパ支援

実施目的：

参加者同士が安心して悩みや関心について話し合い、学び合いながら、関係づくりができるような支援として、育児不安や虐待のリスク要因を持つ妊婦へのペアレンティングプログラムを実施した。

- ①親役割や子育て等への不安の軽減
- ②悩みや気持ちを表現し分かち合うこと・認め合うこと、あるいは自己受容を通してのエンパワメントをはかる
- ③サポートし合う仲間づくり
- ④自分の考え方や感じ方に気づくこと

実施状況

開催日・開催場所・取り扱ったテーマ・参加人数：

グループ	回数	開催日	開催場所	テーマ	人数
I	第1回	5月25日	本学センター研修室	腰痛などの身体症状、夫婦関係、産後の子育てきょうだいとの関わり	3名
	第2回	5月31日	本学センター研修室		2名
II	第1回	10月15日	ひろ助産院（白山）	お互いを知る	7名
	第2回	10月22日	ひろ助産院（白山）	妊娠・出産に向けての心配・体験	10名
	第3回	11月5日	ひろ助産院（白山）	生まれた後の生活や子育てへの心配事や不安	6名
	第4回	11月12日	ひろ助産院（白山）	夫や家族との関係、不満や不安、心配に思うこと	3名
III	第1回	2月11日	ひろ助産院（白山）	お互いを知る	7名
	第2回	2月18日	ひろ助産院（白山）	妊娠中や出産に向けての不安やイライラ	5名
	第3回	3月3日	ひろ助産院（白山）	妊娠・出産・育児期において仕事や自分の時間についてどう向き合うか	5名
	第4回	3月10日	ひろ助産院（白山）	夫婦関係・親子関係について	6名

ファシリテーター：Iグループ 米田 昌代 壺田智香子
 IIグループ 西村真実子 吉川由起子（よしかわ助産院）
 IIIグループ 米田 昌代 岡本みさ子（ひろ助産院）

評価と今後の課題：

ねらい「①不安の軽減」、「②エンパワメント」、「④自分の考え方に気づく」について

参加者より、「妊婦は幸せでキラキラしているというイメージがあるから、こんなネガティブな思いを抱いていたら駄目だと思っていた」、「上の子の世話に追われて、お腹の子と向き合う時間が全く無い。こんな状況で生まれた子に何かあったらそのためじゃないかと後悔しそう」、「自分だけではなく、皆も同じに思いたとわかり安心した」、「皆と話すことによって自分の気持ちが整理できた」等、様々な発言が聞かれ、プログラムのねらいはある程度達成できたのではないかと考える。

ねらい③サポートし合う仲間作りについて

クールの途中より、参加者同士が自主的にメールアドレスを交換して連絡を取り合ったり、最終回では、今後もまた集まりたいとの発言が多く聞かれ、メンバーの連絡網を作成した。しかし、妊婦の場合、途中で切迫早産の兆候が見られたため外出不可になったり、出産を迎えたりと、クールの途中で欠席や終了となる者がいた。また、出産・出産後の育児とは非常に大きなイベントであり、その経過の途中でメンバー同士の関係性が稀薄になっていく可能性も高いため、全員が出産した半年後以降を目安に再会プログラムを実施し、グループの強化や産後の育児の悩みについて話し合う場を設け、継続的な支援が必要であると考えた。

3 情 報 発 信

3-1 オープンキャンパス 2011

1. 目的

看護系大学への進学を希望している高校生や関係者に対して、広く本学の教育内容・環境を紹介するとともに、進路を決定するための情報を提供する。また、大学院進学を希望している方に対して個別相談を行い、情報を提供する。

2. 実施状況

2011年度のオープンキャンパスは、7月17日(土)に開催されました。300名の高校生やその保護者ら、また大学院受験希望者の参加がありました。大学内は多くの参加者で賑わい、在学生の協力も得て、盛況のうちに終了しました。

当日は、講堂での大学概要・入試情報等の説明後、6つのテーマから参加者それぞれが選択した公開授業を講義室や看護学実習室で受講していただきました。その後、看護学実習・フィールド実習・国際交流の紹介、施設見学、各看護学実習室での看護学体験の企画に自由に参加していただきました。また、個別相談コーナーや学生交流コーナーでは、教職員や在学生に入試や受験勉強対策、大学生活について真剣に相談している姿がありました。学生交流コーナーだけでなく、施設見学や看護学体験等さまざまな場面で、在学生が参加者と積極的に交流している様子は和気あいあいとした雰囲気がありました。アンケートによる参加者からの声は「進路の参考になった。オープンキャンパスに来て良かった。」「素晴らしい大学だと思った。ぜひここに入りたい。」など概ね良好でした。このオープンキャンパスが参加者の皆さまにとって本学への理解や関心を深める機会となり、一人でも多くの方に本学の進学を志していただけることを期待しています。

3. 行事内容

1) 進路決定のための情報提供

- (1) 全体説明会(大学の概要・特徴の説明、入試情報の説明、在学生からのメッセージ)
- (2) 教職員による個別相談コーナー

2) 教育内容の紹介

(1) 公開授業のテーマ

「ことばの発達ー子どもは語学の天才かー」 「神経のおはなし」 「『食べる』しくみを体験して学ぼう」 「自分の骨密度を測って、高齢者の骨折を知ろう！」 「新米ママになってみよう！」 「地域で活躍する看護職『保健師』とは？」4年生の健康教育実演をとおして紹介します！」

(2) 看護学実習・フィールド実習・国際交流紹介

3) 教育環境の紹介

- (1) 施設見学(看護学体験)
- (2) 在学生との交流
- (3) 食堂での昼食

4. 次年度に向けて

参加者から寄せられた意見は概ね良好でした。なかでも、在学生と直接交流し、その対応や情報を得られたことへの喜びや達成感の声が多くありました。在学生たちが石川県立看護大学の学生として活動している様子を感じていただけることも本学を知っていただくことにつながっていることでしょう。

今後は、本学の教育・研究活動を一層充実させる中で、その活動を日々情報発信するとともに、参加者の期待に応えられるオープンキャンパスを企画・実施していきたいと考えています。

3-2 大学新聞の発行

本学の現状や活動の成果を理解して頂くため、大学新聞（IPNU キャンパスネット）第20号（2011年10月）、第21号（2012年3月）を発行した。県内では病院、福祉施設、大学および短期大学、看護系専門学校、高校、図書館、市町、教育委員会、実習先等、県外では、看護系大学に送付した。大学新聞の編集は広報委員会で担当している。

各号の主な内容は以下の通りである。

号	内容
第20号	<p>学長就任にあたって</p> <p>大学の主な動き</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第12回入学式 ・地域課題研究ゼミナール支援事業 最優秀賞受賞 ・法人化にあたり ・開学記念行事 ・オープンキャンパス ・新任教員紹介 ・東日本大震災への保健師派遣に参加して <p>JICA研修員受け入れ事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・JICAタジキスタン共和国フォローアップ調査 ・JICAパラグアイ日系研修 <p>ワシントン大学学術交流事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワシントン大学客員研究員 <p>卒業生に関く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助産学専攻科進学の体験記 ・保健師就職の体験記 ・県外大学病院就職の体験記 ・養護教諭特別科進学の体験記 <p>キャンパスライフ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フィールド実習・・・1年生 ・小児看護学実習Ⅰ・・・2年生 ・Ⅴ段階実習(在宅看護学実習・地域看護学実習)・・・4年生 ・サークル紹介(ボランティアサークル) ・第12回看護大学祭 <p>2010年度 国家試験対策と国家試験結果 地域ケア総合センターから キャンパススケジュール2011年度後期</p>
第21号	<p>本学の地域貢献について</p> <p>大学の主な動き</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成23年度卒業式・学位授与式 ・卒業研究発表会 ・博士・修士論文発表会 ・卒業生・修了生の言葉 <p>公開シンポジウム「今、よみがえる、ナイチンゲールからの贈り物」</p> <p>海外出張教員からのトピックス がん看護専門看護師3名が一举に誕生</p> <p>本学の地域貢献特集</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過疎地域を前に看護大生ができることは何？」への挑戦 ・災害ボランティアへの学生の参加 ・来人喜人里創り創生プロジェクト ・認知症にやさしいまちづくりシンポジウム <p>キャンパスライフ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏期アメリカ看護研修に参加して ・第12回看護大祭を終えて ・さくら会総会&懇談会 ・日本家族看護学会ベストポスター賞受賞 <p>この1年を振り返って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎看護実習Ⅰ・・・1年生 ・基礎看護実習Ⅱ・・・2年生 ・第Ⅴ段階実習・・・3年生 ・卒業研究・・・4年生 ・大学院・・・博士前期課程1年生 <p>地域ケア総合センターから 2011年度 国家試験対策と国家試験結果 卒業生の内定状況 キャンパススケジュール2012年度前期・後期</p>

4 国際化促進

4 国際化促進

4-1 夏季アメリカ看護研修

夏期アメリカ看護研修は、本学学生および大学院生のために用意された国際化推進プログラムの1つである。平成23年度も例年通り、4月に行われる各学年向けガイダンスや7月に開催されるオープンキャンパスなどで本研修に関する広報を行なった。

本学初めての試みとして、平成23年度の本研修は西海岸最大の都市・ロサンゼルスで実施された。8月28日～9月6日の日程で行なわれ、学生11名が参加した。

例年より費用が安くなったこと、宿泊は日本人スタッフが常駐する寮を利用するため治安面がよいことがメリットとしてあげられた。そのため、参加し易くなった学生も多かったと思われる。

米国の小児医療施設やホスピスの視察はもちろん、米国で働く日本人看護師による講義により日米の看護の違いについても学んだ。看護研修、生活に必要な英会話レッスン、現地学生との交流、オプションツアーなど多彩なプログラムで実施された。

本研修の参加希望者の多くが参加出来ること、学生にとって意義のある研修を立案することを目標に掲げ、今後も全学をあげて努力していく必要がある。

(文責：吉野京子主幹、国際交流委員会)

4-2 平 23 年度パラグアイ共和国日系研修報告： 高齢者福祉におけるデイサービス（デイケアと介護予防）

この研修事業は独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、石川県立看護大学と羽咋市社会福祉協議会が実施運営する。中南米日系社会支援の一環として平成 19 年度から開始された。

1) 研修目的

高齢者の尊厳を支え、それぞれの地域で健康な日常生活の自立を維持・支援するためのデイケアと介護予防の実際について学び、その機能を地域でシステム化することを目的として研修する。

2) 研修実施体制

(1) 研修期間：2012 年 6 月 26 日～9 月 8 日

(2) 研修員数：1 名

(3) 研修場所：石川県立看護大学、羽咋市社会福祉協議会

(4) 講師 川島和代 高山成子 浅見洋 松原勇 塚田久恵 中道淳子 藤田三恵 彦聖美
油野聖子 金子紀子 落合庸子（石川県立看護大学）
立浦紀代子 堀和秀 柳沢昌代 松浦朝子 宮下陽江 中本美幸 干場澄江
坂本藍子 松本緑（羽咋社会福祉協議会）
和田正美（羽咋市役所） 山崎敏美（公立羽咋病院）

3) 研修内容

講義・ゼミ討議形式で高齢者の理解や高齢者支援のためのケアシステム、地域での介護予防をふまえたシステム化についての研修を行う。また、羽咋市における独居や高齢者世帯・若い世代との同居等、地域で暮らす元気高齢者・要注意高齢者・ねたきりや認知症などの支援や取り組みについて実習と研修を深める。異文化での高齢者を取り巻く家族関係について学び、日系高齢者への尊厳を支え健康といきがいづくり、自国における介護予防の活動実践やケアシステム化を検討する。

実習は、主に羽咋市内の病院や老人福祉センター、デイケア・デイサービスセンター等で実施する。また県外施設では、特定非営利活動法人このゆびと一まれ（富山県）、高齢者福祉施設けま喜楽苑（兵庫県）で見学実習を行う。

研修のプログラムは以下の通り。

- (1) 自国の紹介と目標を設定する
- (2) 羽咋市の健康高齢者の取り組みの理解から、自国の文化の違いを知り、高齢者支援を考える
- (3) 日常生活を支える支援方法を考える
- (4) 在宅・訪問看護・家族支援について学ぶ
- (5) 保健福祉事業から、高齢者の環境と支援事業・システムを理解する
- (6) 介護予防を視点にしたケア、システムを学ぶ
- (7) 研修内容を自国で必要とされる支援内容に具体的にどのように活かせるのかをまとめる

研修のまとめとして、研修で得た知識・技術を用いて帰国後に実施する活動についてアクションプランをまとめ、発表をした。研修者が研修から学び、自国の活動に活かせるとした内容は以下の通りであった。

・ボランティアグループの後継者育成として、地区長等の男性の参加の促しや婦人部と共同での取

り組みを行うこと、日本人会との連携を強化していくことに力を入れる。

- ・茶話会参加者で持病を持った高齢者が安心して食べられるように、減塩の工夫や旬の食材を活かした料理の提供を行うこと、また日常生活の注意点についての情報提供も行っていく。

- ・茶話会で身体状況に合わせたレクリエーションのメニューを考え提供すること、また利用者を講師として物作りや講話の企画や子どもと高齢者の交流の場を増やすなど、虚弱高齢者も元気高齢者も満足できるレクリエーションを進めていく。

- ・地域の認知症高齢者と家族に対して、茶話会の参加を促し認知症の方の持てる力を引き出す関わりをおこなう。茶話会の参加により介護者が休息できる時間を作り、また家族同士の交流の場も提供していく。

5 調 査 研 究

5-1 指定介護老人福祉施設における終末期ケアの現状と課題

I. 研究概要

1. 研究期間 平成 22 年度～平成 23 年度
2. 研究代表者 浅見 洋
3. 研究分担者 川村みどり 塚田久恵 端久美 愛徳誓城 木村美代 浅見美千江
川島和代 林一美 藤田三恵 彦聖美 木村美代 相原翔子
4. 研究発表
 - 1) 相原翔子、浅見洋：指定介護老人福祉施設における終末期ケアの体制の現状と課題－看護業務と役割に焦点をあてて－、第 14 回在宅ケア学会、2010. 3. 20.、広島
 - 2) 平成 22 年度調査研究報告 特養における終末期ケアの現状と課題、全 30 頁、2011. 8.
 - 3) 川村みどり 浅見洋 塚田久恵：石川県内の特別養護老人ホームの介護士における看取りに関する意識調査、第 15 回在宅ケア学会、2011. 3. 18.、東京
 - 4) 塚田久恵、浅見洋：指定介護老人福祉施設における終末期ケアの現状と課題、石川看護雑誌第 9 号、61-70、2012. 3.
5. キーワード
 1. 指定介護老人福祉施設
 2. 終末期ケア
 3. 看取り
 4. 介護士
 5. 医療連携
 6. 看護師

II. 研究成果

I. はじめに

平成 18（2006）年 4 月の介護保険制度改定で、指定介護老人福祉施設（特養と略記）では「重度化対応加算」及び「看取り介護加算」が創設された。それを契機として指特養における死亡割合は全国的に増加傾向（2005 年 2.2%→2010 年 3.5%）にある。欧米諸国に比して、施設での死亡割合は依然として高くないが、将来的には施設での「看取りケア」が増加すると考えられ、その対応は不可避である。

そうした背景と関心に基づいて、石川県内の特養における看取りケアの現状と課題を調査したので報告する

II. 研究方法

1. 研究対象

石川県内の全特養 64 施設（平成 22 年度末）に勤務する介護職員 320 名（64 施設×5 名）

2. 日程

調査期間は平成 23 年 8 月 1 日～26 日

3. データ収集方法

特養 64 施設の施設管理者宛に、研究の説明および依頼文を添え、調査票 5 名分を一括で郵送した。管理者に施設内の看取り経験を有する介護士 5 名を選んでいただき、調査対象に研究の説明、依頼文、調査票、着払いの返信用封筒をわたしていただいた。回答済み調査票の回収は、回答者本人が直接郵送で返送する方法でおこなった。

4. 調査項目

- 1) 対象者の近親者、および職場での死の看取り体験
- 2) 看取りに関する考え
- 3) 看取りに対する態度
〈フロンメルトのターミナルケア態度尺度〉を使用
- 4) 対象者の属性
- 5) その他（意見）

5. 分析方法

統計ソフト SPSS 18.0 for windows を用いて単純集計、 χ^2 検定を行った。

6. 倫理的配慮

①その対象となる個人の人権の擁護

1) 施設管理者に対して

(1) 依頼文章にプライバシー保護等の他、研究の主旨、方法等を記した。

(2) 調査対象者の選択の際に研究参加を強制しないよう依頼し、協力拒否による不利益は、施設・個人いずれにも生じないことを伝えた。

2) 介護士（調査協力者に対して）

(1) 依頼文書に、研究の主旨、方法、プライバシーの保護等を記した。

管理者を通して調査票を配布したが、本人が調査票を直接、返信するので施設側には回答の有無はわからないことを明記し、自由意志での調査協力を依頼した。

(2) 調査票には施設・個人名とも記入不要とした。

(3) 調査終了後、名簿およびデータの管理、処分を速やかに実行することを明記した。

III. 結果

1. 対象者の背景

対象 320 人中、226 通の有効回答（有効回答率 70.6%）が得られた。各回答の年齢別割合は、20 代 53 人（23.5%）、30 代 72 人（31.9%）、40 代 51 人（22.6%）、50 代 50 人（22.1%）で、平均年齢は 39.0 ± 10.2 歳。性別は男性 44 人（19.5%）女性 182 人（80.5%）であった。

介護士一人当たりが看取った人数の平均は 7.53 ± 13.81 人。5 人未満 57.0%、5 人以上 10 人未満 22.7%、10 人以上 20 人未満 12.8%、20 人以上 50 人未満 5.2%、50 人以上 2.3% で、5 人未満が最も多く、10 人未満が全体の 79.7% の約 8 割を占めた。（表 1）

表 1：看取った人数 n=172

	n	%
平均	7.5±13.8人	
5人未満	98	57.0
5人以上10人未満	39	22.7
10人以上20人未満	22	12.8
20人以上50人未満	9	5.2
50人以上	4	2.3

介護士の臨床経験年数の平均は 10.1 ± 5.89 年。最も割合が多かったのは、6～10 年で、全体の 41.4% であった。（表 2）

表 2：臨床経験年数 n=222

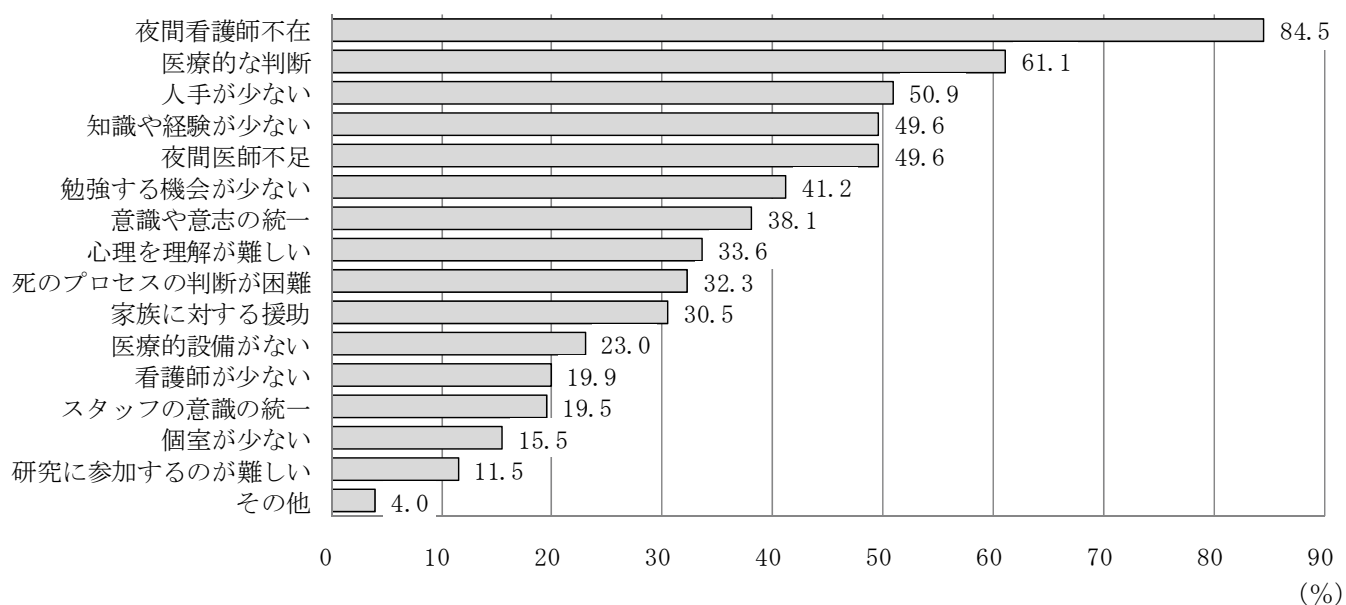
	度数	%
平均	10.1±5.89年	
0～5年	53	23.9
6～10年	92	41.4
11～15年	33	14.9
16～20年	31	14.0
20～25年	13	5.9

2. 施設で看取りを行う上で不安なこと

施設で看取りを行う上で不安なことについて 16 項目の中から当てはまるものを全て選んでもらった。その結果 226 人中、191 人（84.5%）の介護士が「夜間に看護師がいない」という項目を選択していた。次いで「医療的な判断が難しい」138 人（61.1%）、「介護職の人手が少ない」115 人（50.9%）、「看取りの知識や経験が少ない」112 人（49.6%）、「夜間、医師がいない」112 人（49.6%）の順であった。

不安な項目の中で選択した割合が少なかったのは、「時間的に看取り研究に参加するのが難しい」26 人（11.5%）、「看取り用の個室が少ない」35 人（15.5%）、「介護スタッフ間の看取りに対する意識が統一されていない」44 人（19.5%）、「看護師が少

図1：施設での死の看取りの不安



ない」45人(19.9%)、「医療設備がない」52人(23.0%)「家族に対する援助が難しい」69人(30.5%)であり、いずれも30%を下回る結果であった。(図1)

3. 看取り不安と経験年数の比較

図1の「施設で看取りを行う上で不安なこと」を、介護士の臨床経験年数を2群(0～9年をグループ①、10～25年をグループ②)に分けて、 χ^2 検定を行った。(表3)

「死を看取るための個室が少ない」という項目では、②の臨床経験年数が多い介護士のほうが、思うと答えた割合が有意に高かった。他の項目では、臨床経験年数と不安との間に、有意差は認められなかった。

4. 看取りの有無と不安

「死の看取りについての考え」について5件法で問うた。その結果を、思わない(そう思わない、全くそう思わない)、思う(そ

表3-1：看取り不安と経験年数の比較

	思う (%)	思わない (%)	χ^2 検定
夜間に看護師がいない			
①0～9年	85.6	14.4	0.415
②10～25年	83.7	16.3	
夜間に医師がいない			
①0～9年	44.9	55.1	0.069
②10～25年	55.8	44.2	
看取りケアについて知識や経験が少ない			
①0～9年	55.1	44.9	0.052
②10～25年	43.3	56.7	
看取りケアについて勉強する機会がない			
①0～9年	38.1	61.9	0.261
②10～25年	43.3	56.7	
介護職の人手が少ない			
①0～9年	51.7	48.3	0.453
②10～25年	50.0	50.0	
医療的な判断が難しい			
①0～9年	66.1	33.9	0.075
②10～25年	55.8	44.2	

* $p < 0.05$

表3-2：看取り不安と経験年数の比較

	思う (%)	思わない (%)	χ^2 検定
介護スタッフ間の「死の看取り」に対する意識や意志の統一ができていない			
①0～9年	35.6	64.4	0.188
②10～25年	42.3	57.7	
看取りが近い入所者の家族に対する援助が難しい			
①0～9年	33.9	66.1	0.206
②10～25年	27.9	72.1	
人の死のプロセスを判断するのが難しい			
①0～9年	38.1	61.9	0.051
②10～25年	26.9	73.1	
死を看取るための個室が少ない			
①0～9年	10.2	89.8	0.012 *
②10～25年	22.1	77.9	
死にゆく人の心理を理解するのが難しい			
①0～9年	39.0	61.0	0.074
②10～25年	28.8	71.2	
看護師が少ない			
①0～9年	15.3	84.7	0.050 *
②10～25年	25.0	75.0	
医療的設備がない			
①0～9年	22.0	78.0	0.358
②10～25年	25.0	75.0	
看護スタッフとの「死の看取り」に対する意識が統一されていない			
①0～9年	16.9	83.1	0.165
②10～25年	23.1	76.9	
時間的に看取りケアの研究に参加するのが難しい			
①0～9年	10.2	89.8	0.290
②10～25年	13.5	86.5	
その他			
①0～9年	2.5	97.5	0.191
②10～25年	5.8	94.2	

* $p < 0.05$

う思う、非常にそう思う) に分けて分析した結果、最も高かったのは、「施設で死を看取りたいと考えており、準備態勢を取りたい」74.4%であった。次いで、「自宅での死が望ましいと考え、在宅での看取りを勧めたい」38.9%、「死の看取りに不安を感じており、できれば避けたい」39.3%、「施設で入所者の死を看取るのは無理と考え、入院を勧めたい」19.5%、「どうしていいかわからないので、成り行きに任せたい」11.8%の順であった。

さらに、思う、思わない、を近親者の看取りの有無の2群で χ^2 検定を実施した。「死の看取りに不安を感じておりできれば避けたい」、「施設での看取りは無理と考え、入院を勧めたい」の2項目では、看取りを経験した人の方が、思わないと答えた割合が有意に高かった。(表4)

5. 諸属性と看取り不安の関係

諸属性と看取り不安の有無で2群比較を行った結果、看取った人数が少ない人ほど、看取りに対する不安が有ると答えた人の割合が有意に高かった。しかし、介護士の年齢、経験年数では有意差はみられなかった。(表5)

6. 看取りケアにおける意識

フロンメルトのターミナルケア態度尺度は因子1「死にゆく人へのケアの前向きさ」(16項目)、因子2「患者・家族を中心とするケアの認識」(13項目)、因子3「死の考え方」(1項目)で構成され、「全くそうは思わない」から「非常にそう思う」の5件法で回答するものである。

態度尺度の得点は3因子とも3.5～4.0点の範囲であった。(表6)

因子1では「患者の死が近づくにつれて関わりを少なくすべき(逆転)」「死にゆく患者へのケアに時間をかけるのを好まない(逆転)」「死にゆく患者と親しくなる

表4：近親者の看取りの有無と死の看取りについての考え

		思う (%)	思わない (%)	χ^2 検定
施設で死を看取りたいと考えており、準備態勢を取りたい	有	76.8	23.2	0.300
	無	71.2	28.8	
死の看取りに不安を感じており、できれば避けたい	有	28.9	71.1	0.007 **
	無	48.8	51.2	
施設で入所者の死を看取るのは無理と考えており、入院を勧めたい	有	12.6	87.4	0.011 *
	無	28.8	71.2	
自宅での死が望ましいと考えており、在宅での看取りを勧めたい	有	39.0	61.0	0.576
	無	38.8	61.2	
どうして良いかわからないので、成り行きにまかせたい	有	8.1	91.9	0.121
	無	15.6	84.4	

*p<0.05, **p<0.01

表5：看取り不安と看取った人数・年齢・経験年数の比較

	思う (%)	思わない (%)	χ^2 検定
看取った人数			
0～10人	38.1	61.9	0.006 **
11～100人	5.9	94.1	
年齢			
21～39歳	39.5	60.5	0.536
40～60歳	39.0	61.0	
臨床経験年数			
0～9年	41.2	58.8	0.412
10～25年	38.3	61.7	

** p < 0.01

表6：ターミナルケア態度尺度の各因子の得点

1. 死にゆく人へのケアの前向きさ	3.7±0.4点
2. 患者・家族を中心とするケアの認識	3.8±0.3点
3. 死の考え方	3.5±0.7点

のは怖い（逆転）」が4点以上、最低は「死にゆく患者と差し迫った死について話すのは気まずい（逆転）」3.0±1.0点であった。因子2では「患者の身体的ケアの要求は認めるべきではない（逆転）」「死にゆく患者に融通の利く面会時間を許可すべき」「家族は死にゆく患者が残された人生を最良に過ごせるように関わるべき」「死にゆく患者が自分の気持ちを言葉に表すことは本人にとって良い」が4点以上で、最低は「死にゆく患者の場合、鎮痛剤への依存を問題にする必要はない」2.9±0.9点であった。（表7）

IV. 考察

1. 施設で看取りを行う上で不安なこと

夜間の看護師や医師の不足、医療的判断が難しいなど、医療的専門的知識との関連で不安であると答えた介護士が半数以上いた。先行研究¹⁾では、施設全体の、平均看護師数は5.3±2.1人、日勤の平均看護師数は3.6±1.6人、看護師が夜勤体制に含まれている施設は64施設中5施設にすぎなかった。医師の配置については、常勤医師がいるのは1施設のみであった。そのため、看

看護師の夜間対応はオンコール、勤務医の対応は「必要時の訪問」「電話指示」がほとんどである。施設内での死亡時間、医療処置の必要性は夜間帯のほうが日勤帯より多い傾向がある。²⁾

また、入所者の特養内死亡、高度な医療機器を装着した入所者の増加等を勘案すると、施設内の医療体制、特に夜間の医療体制の整備が求められる。加えて、医療と介護のより緊密な連携が必要になると思われる。供給面でも財政面でも医療者の確保が困難な状況においては、対応策の一つとして介護士の医療行為の範囲が徐々に拡大しているのは歓迎すべきことである。しかし、その前提として現在の介護士の医行為に関する研究のさらなる蓄積と養成課程の教育課程の改正が必要であると思われる。

図1では、約4割の介護士が看取りに関して勉強する機会がないと答えている。そのため、施設で、看取りに対する教育や指導を行う機会をさらに設け、知識を高めていく必要がある。また、介護士、看護師と一緒に講習を受ける機会があれば、看取りについて、お互いに意見を交換することがあれば、「看取りに対する意識が統一されていない」という問題の解決を計ることができるかも知れない。

2. 看取りの有無と看取りに対する考え方

表4の結果から、近親者の看取りを経験した人ほど、看取りに対する不安が少なく、看取りを避けたいとは思っていないことが示唆された。看取り体験は看取りの不安を軽減する。ただし、看取りで体験される動揺や葛藤などの否定的な感情が、それ以後の看取りへの不安形成に関与する可能性も考えられる。そのため、積極的に看取りを行おうとする姿勢を育てるためには、動揺や葛藤を解消し、不安が生じないような継続的なサポートが必要である。

表5の結果から、近親者の看取りを経験

した人ほど、入所者の「施設での看取りはできる」、「入院を勧めたいとは思っていない」ということが明らかになった。近親者を看取った経験から、看取りとは決して難しいことではなく、看取る側の事情が許せば、病院でなくても可能であると、身を持って体験した結果であると考えられる。

3. 諸属性と看取り不安

表3では、臨床経験年数が少ない人ほど「死を看取るための個室が少ない」と考えていた。また、表5では年齢、臨床経験年数と看取り不安の間には有意差がみられなかった。つまり、年齢や臨床経験年数を重ねていても、看取り不安を感じている人がいるということである。しかし、看取った人数が少ない人ほど、看取りに対する不安が有意に高かった。看取り不安は看取った経験によって変化すると考えられる。しかし、誰もが同じように看取りを経験することができるわけではないので、看取りの経験がない介護士も、前もって心の準備しておく必要がある。そのためは、研修やカンファレンスを通して、疑似的ではあっても看取り体験を重ねることが大切であると考えられる。

4. 看取りの態度

フロンメルトのターミナルケア尺度からは、本調査対象となった介護士は看取りケアにおおむね積極的で、ケアに時間をかけ、親密な関係を形成しようと考えていることが明らかになった。また、死にゆく人への身体的ケアや家族のケアへの参加を大切に考えていることも示唆された。死にゆく人は死を受容する可能性があり、自身の気持ちを話すことは本人にとって良いとしながら、介護士は死が話題になることに気まづさも感じている。ケア場面で葛藤が生じることを恐れるからであろう。

また、鎮痛剤の使用に消極的なのは、福

祉現場で医療的な緩和ケアが浸透していないためだと考えられる。

V. まとめ

1. 介護士が今までに看取った人数は、平均 7.53 ± 13.82 人であった。
2. 施設で看取りを行う上で半数以上の介護士が不安に感じている事は「夜間に看護師がいない」「医療的な判断が難しい」「介護職の人手が足りない」「看取りの知識や経験がない」「夜間、医師がいない」ということである。そのため、今後は施設内の医療体制、特に夜間の医療体制の整備と、介護士の医行為に関する研究の充実、教育課程の改正がさらに必要になると考えられる。
3. 臨床経験年数が短い看護師のほうが「死を看取るための個室が少ない」と考えている割合が有意に高かった。「死の看取りに不安を感じており、できれば避けたい」と「施設で入所者の死を看取るのは無理と考え、入院を勧めたい」の項目では、近親者の看取りを経験していない人のほうが「思う」と答えた割合が有意に高く、また施設で看取った人数が少ない人ほど、看取りにたいして不安を感じている割合が有意に高かった。つまり、看取りに対する不安は、看取りの有無や看取った人数によって左右されることがわかる。そのため、今後介護士は、研修やカンファレンスを通して、疑似的であっても看取り体験を重ねることで、患者との関わり方や、心理プロセスを少しずつ理解していく必要があると考える。
4. 石川県内における介護士は看取りケアに積極的であるが、葛藤するケア場面もあると考えられる。実際の看取り体験や事例検討を重ねて看取りケアを具体的に

学び、また精神面でのフォロー体制を整備することが、より良い看取りケア実践の支援となると考えられる。

謝辞

アンケートに協力いただきました、石川県下の特別養護老人施設の職員の方々に深謝いたします。

参考文献

1. 小林尚司, 木村典子 (2010) : 特別養護老人ホームの新人介護職員の看取りのとらえ方. 老年社会科学, 32(1). 48-55.
2. 井上千津子 (2010) : 介護福祉士を対象とした教育の現状と課題. 老年精神医学雑誌 21. 1082-1088.
3. 柏木哲夫 (2002) : ターミナルケアとメンタルヘルス. 日本社会精神医学会雑誌. 11:80-84.
4. 松井美穂, 新田章子, 川崎涼子, 中村梓子, 岩下友華 (2010) : 認知症グループホーム職員における看取り意識. Hospice and Home Care 2010 18(19).

表7：フロンメルトのターミナルケア態度尺度の得点

n=226

項目番号	質問項目	平均	標準偏差	最小	最大	無回答	
因子1	死にゆく人へのケアの前向きさ	3.70	0.39	2.75	4.81		
1	死にゆく患者をケアすることは、私にとって価値のあることである。	3.79	0.93	1	5	5	
2	死は人間にとって起こりうる最も悪いことではない。	3.71	0.89	1	5	2	
*	3	死にゆく患者と差し迫った死について話をすることを気まずく感じる。	3.00	1.02	1	5	2
*	5	私は死にゆく患者のケアをしたいとは思わない。	3.82	0.83	2	5	2
*	6	ケア提供者は死にゆく患者と死について話す存在であるべきではない。	3.53	0.85	1	5	1
*	7	私は死にゆく患者へのケアに時間をかけることはあまり好きではない。	4.12	0.73	1	5	1
*	8	私がケアをしている死にゆく患者が、きっと良くなるという希望を失ったら、私は動揺するだろう。	3.36	0.88	1	5	2
*	9	死にゆく患者と親密な関係を築くことは難しい。	3.68	0.87	1	5	2
*	11	患者から「私は死ぬの？」と聞かれた場合、私は話題を何か明るいものに変えるのが最も良いと思う。	3.38	0.76	1	5	0
*	13	私がケアをしてきた患者は、自分の不在の時に亡くなって欲しい。	3.90	0.82	1	5	0
*	14	私は死にゆく患者と親しくなることが怖い。	4.03	0.74	1	5	0
*	15	私は人が実際に亡くなった時、逃げ出したい気持ちになる。	3.97	0.85	1	5	1
*	17	患者の死が近づくとつれて、ケア提供者は患者との関わりを少なくするべきである。	4.39	0.62	2	5	0
*	26	終末期の患者の部屋に入って、その患者が泣いているのをみつけたら、私は気まずく感じる。	3.28	0.94	1	5	3
*	29	死にゆく患者の近くにいる家族のために、しばしば専門職としての仕事が妨げられると思う。	3.66	0.73	2	5	2
	30	ケア提供者は、患者の死への準備を助けることができる。	3.61	0.77	1	5	1

因子2 患者・家族を中心とするケアの認識		3.75	0.33	2.92	4.62	
4	家族に対するケアは、死別や悲嘆の時期を通して継続されるべきである。	3.68	0.80	1	5	4
12	死にゆく患者の身体的ケアには、家族にも関わってもらわなければならない。	3.79	0.90	1	5	1
16	死にゆく患者の行動の変化を受け入れることができるように、家族は心理的なサポートを必要としている。	3.94	0.75	1	5	0
18	家族は死にゆく患者が残された人生を最良に過ごせるように関わるべきである	4.11	0.79	1	5	1
* 19	死にゆく患者の身体的ケアに関する患者自身の要求は、認めるべきではない。	4.14	0.64	1	5	1
20	家族は、死にゆく患者ができる限り普段通りの環境で過ごせるようにするべきだ。	3.75	0.74	1	5	0
21	死にゆく患者が自分の気持ちを言葉に表すことは、その患者にとって良いことである。	4.03	0.66	2	5	0
22	死にゆく患者のケアにおいては、家族もケアの対象にすべきである。	3.99	0.67	2	5	0
23	ケア提供者は、死にゆく患者に融通の利く面会時間を許可するべきである。	4.13	0.74	1	5	0
24	死にゆく患者とその家族は意思決定者としての役割を担うべきである。	3.82	0.75	2	5	2
25	死にゆく患者の場合、鎮痛剤への依存を問題にする必要はない。	2.88	0.91	1	5	0
27	死にゆく患者が自分の状態を尋ねた場合、正直な返答がなされるべきである。	3.01	0.53	1	5	0
* 28	家族に、死にゆくことについて教育をすることは、ケア提供者の責任ではない。	3.46	0.81	1	5	0
因子3 死の考え方						
10	死にゆく患者が、死を迎え入れる時がある	3.50	0.72	1	5	1

各項目は1～5点の範囲を取り、点数が高いほど積極的な態度を示す

*は逆転項目を示し、各項目の範囲、平均、SDは逆転させた後の値である

5-2 高齢者の要介護状態となる原因疾患と要介護認定 に関連する要因についての実態調査

I. 研究概要

1. 研究期間 平成 24 年 2 月～平成 25 年 3 月
2. 研究代表者 塚田久恵
3. 研究分担者 松原勇 中道淳子 曾根志穂 金子紀子（石川県立看護大学）
茅山加奈江 宮本奈緒美（石川県健康福祉部健康推進課健康フロンティアグループ）
4. 研究発表 なし
5. キーワード
 1. 介護保険
 2. 健康診査
 3. 診療報酬明細書情報
 4. 予防的介入

II. 研究成果

1. 目的

石川県においては、活力ある高齢社会の実現に向けて「いしかわ健康フロンティア戦略」が展開され、各市町村では「介護予防事業」が実施されているが、介護保険での要介護認定者数は年々増加している（要介護・要支援認定者数<第1号被保険者>、2010年4月末現在48,294人、2008年4月末現在45,289人）。このような中で、石川県内の高齢者が要介護状態に至る経過、原因疾患等を明らかにし、介護予防策に資する対策を講じていく必要がある。

そこで、新規に介護保険の要介護認定を受けた者を対象に、主な原因疾患別に要介護に至る経過を分析し、予防的介入の時期、方法等に関して検討し、介護予防プラン作成のための基礎資料とする。

2. 方法

(1) 研究のデザイン

既存データによる実態調査

(2) 調査対象

平成 22 年度新規介護保険認定者 276 名

(3) 調査期間

平成 24 年 2 月～平成 25 年 3 月

(4) 調査方法

既存資料による分析

(5) 倫理的配慮

研究者の所属する大学の倫理委員会の承諾を受ける。

以下についてモデル市に説明し、研究の趣旨をご理解いただいた上、共催関係の立場で、研究を開始する。

(ア) 対象となる個人の権利の擁護

(a) モデル市に対しては、倫理的配慮等の他、研究の趣旨、方法等を示した文書を同封し、研究への共催を依頼する。また、個人情報の保護に留意する。

(b) 石川県国民健康保険団体連合会及び石川県後期高齢者医療広域連合に対しては、対象となる診療報酬明細書情報の提供について、モデル市から情報提供の依頼をする。

(イ) 匿名性への配慮

介護認定調査票及び診療報酬明細書（レセプト）の抽出については、モデル市の職員及び石川県国民健康保険団体連合会、石川県後期高齢者医療広域連合の職員が行う。

研究者が個人のデータを入力・分析する際には、個人を特定できないように個人識別情報を削除したデータベースを用いて行う。

調査票等の管理は、施錠できる保管庫を使用す

るなど、厳重に行う。また、必要最低限の研究者で原データを扱う。

研究終了後、リストや調査票はシュレダーで裁断、破棄する。

補助用員については、雇用契約を交わし、守秘義務の要請及び情報の漏洩防止を図る。作業時には、大学職員が同席する。

(6) 調査項目

(a) 基本的属性

性別、初回認定時年齢、初回認定時介護度、初回認定時の原因疾患

(b) 診療情報明細書情報

生活習慣病及び関連疾患(脳内出血、脳梗塞、くも膜下出血、脳動脈瘤及び解離、内頸動脈狭窄症、心疾患、糖尿病、高血圧性疾患、糸球体疾患及び腎尿細管質性疾患、高脂血症、高尿酸血症、白内障、糖尿病性網膜症、筋骨格系及び結合組織の疾患、その他の疾患)の有無と受療年月日(診療開始年月日)、医療費総額
歯科疾患(歯周疾患)の有無と受療年月日(診療開始年月日)、歯科医療費総額

(c) 健康診査情報

健康診査受診年月日とその検査項目の結果(体重、身長、BMI、腹囲、中性脂肪、総コレステロール、HDLコレステロール、LDLコレステロール、GOT、GPT、γGTP、尿酸、血圧、ヘマトクリット、ヘモグロビン、血糖、HbA1c、尿糖、血清クレアチニン、eGFR、心電図、眼底検査、尿蛋白、尿潜血)、総合判定結果

(d) 介護保険認定調査項目

身体機能・起居動作得点、生活機能得点、認知機能得点、精神・行動障害得点、社会生活への適応得点

(7) 研究スケジュール

(a) 平成 23 年度

介護保険の要介護状態に至った主な原因疾患別に介護保険認定時の障害高齢者自立度、認知高齢者自立度等との関連を介護保険認定調査票(平成 22 年度新規分)の既存資料を基に分析する。

(b) 平成 24 年度

上記分析結果をさらに発展させ、介護保険認定前の健康診査受診状況・検査結果及び診療報酬明細書(レセプト)情報とリンクさせ、関連要因

を抽出する。

これらの調査結果を基に介護予防プランの作成に向けて具体的に検討する。

3. 平成 23 年度結果の概要

(1) 対象者の属性(表1)

平成 22 年度新規介護保険認定者は 276 人であった。

性別は、男性 99 人(35.9%)、女性 177 人(64.1%)であった。

介護保険認定時の要介護度は、要支援 1 は 97 人(35.1%)、要支援 2 は 29 人(10.5%)、要介護 1 は 74 人(26.8%)、要介護 2 は 30 人(10.9%)、要介護 3 は 18 人(6.5%)、要介護 4 は 14 人(5.1%)、要介護 5 は 14 人(5.1%)であった。

介護保険認定時の原因疾患は、脳血管疾患が 56 人(20.3%)、認知症が 48 人(17.4%)、循環器疾患が 42 人(15.2%)、関節疾患が 28 人(10.1%)、骨折が 24 人(8.7%)、癌が 18 人(6.5%)、廃用性機能低下が 14 人(5.1%)、内分泌疾患が 14 人(5.1%)、精神・知的障害が 10 人(3.6%)、呼吸器疾患が 8 人(2.9%)、パーキンソンが 5 人(1.8%)、リウマチが 1 人(0.4%)、その他 7 人(2.5%)であった。当調査時の生存状況は、生存が 231 人(83.7%)、死亡が 39 人(14.1%)、転出が 6 人(2.2%)であった。

		n=276	
		人	%
性別	男	99	35.9
	女	177	64.1
介護保険認定時の要介護度	要支援1	97	35.1
	要支援2	29	10.5
	要介護1	74	26.8
	要介護2	30	10.9
	要介護3	18	6.5
	要介護4	14	5.1
介護保険認定時の原因疾患	要介護5	14	5.1
	脳血管疾患	56	20.3
	認知症	48	17.4
	循環器疾患	42	15.2
	関節疾患	28	10.1
	骨折	24	8.7
	癌	18	6.5
	廃用性機能低下	14	5.1
	内分泌疾患	14	5.1
	精神・知的障害	10	3.6
調査時の生存状況	呼吸器疾患	8	2.9
	パーキンソン	5	1.8
	リウマチ	1	0.4
	その他	7	2.5
	生存	231	83.7
	死亡	39	14.1
	転出	6	2.2

5-3 看護師の自己実現を通じた地域医療の充実を目指して

—現職看護師の勤務状況と困難要因 現況から示唆される解決への足がかり—

I. 研究概要

1. 研究期間 平成23年4月～平成24年3月
2. 研究代表者 多久和 典子
3. 研究分担者 川島 和代、丸岡 直子、松原 勇、岩城 佐太雄（石川県健康福祉部 医療対策課 管理・看護Gグループリーダー）
4. 研究発表
 - 1) 大井山果, 松田愛美, 北村佐和子, 松原 勇, 多久和典子: 虚血性心疾患の予防を目指した看護職者による患者指導の研究 — 地域の医療機関を対象とした調査から — 石川看護雑誌 9: 33-42 (2012)
 - 2) 中川恵子, 多久和典子: 地域における外国人医療の現在と今後への展望— 医療機関を対象とした調査から — 石川看護雑誌 9:23-32 (2012)
5. キーワード
 1. 地域医療
 2. 看護師
 3. 自己実現
 4. アンケート調査
 5. 勤務形態

II. 成果

1. はじめに

人類未踏の超高齢社会を迎える我が国において、たれもが願う健康長寿社会の実現に少しでも近づけるためには、第一に疾病の予防を推進し、医療費を削減すること、第二に、患者・高齢者を手厚く治療しケアする高度専門職の育成を質・量ともに充実させること、そして、彼らによる疾病予防の効果と医療・ケアの恩恵が、我が国の隅々まで等しく行き渡るようにすることが必要であり、焦眉の課題となっている。医療専門職のなかでも、最大のポピュレーションを占め、患者にもっとも近い存在である看護職が、患者指導や多職種協働に果たす役割は今後益々重要となって来る¹⁾。石川県においても、一人でも多くの看護職者が、健康的で充実した個人の生活の基盤の上に、それぞれの持ち場で高度専門職としての能力を開発・発揮し、公私ともに自身がめざすところの自己を実現して行くことができれば、地域における健康長寿社会の実現を大きく推進すると期待される。この観点から、本研究は、県内において活躍する看護

師の自己実現を支援する環境を整えるために、現在ある課題を明らかにし、課題解決の方策を見出し、施策に反映させることを目的として行った調査研究である。本研究の詳細な内容は別冊調査研究報告書に詳述した。また、様々な観点からの解析結果を後日論文にまとめ公表予定である。

2. 方法

石川県内の人口集中地域（A地区）、および、過疎地域（B地区）をとりあげ、それぞれの中核病院、計15施設（A地区8病院：病院1～8、B地区7病院：病院9～15）に勤務する、臨床経験2年目以上の病棟看護師を対象として、下記の内容についての任意・無記名・記入式のアンケート調査を平成23年7月～8月の期間に行った。予め本学倫理委員会において研究の承認を得、各医療施設看護部のご協力を仰ぎ、対象者には研究への協力を文書で依頼した。アンケートへの回答をもって研究協力への同意が得られたと判断した。

アンケート内容は、県健康福祉部医療対策

課からの要望を含み、以下の6つの大項目から構成される。すなわち、1) 対象者の属性(性別、年齢、看護師経験年数、婚姻の有無等)、2) 生活環境(睡眠時間、育児・介護状況)、3) 勤務環境(看護基準、勤務形態、超過勤務・サービス残業時間、夜勤状況、休暇制度と実際の休暇取得状況、パートタイム看護師歳用の有無)・職務満足度・生きがいの程度、4) 健康状態とストレス(心身の健康状態、ストレスの要因、ストレス軽減・改善策)、5) 研修体制(院内の取り組み、院外研修)、6) 日本の地域医療に貢献する看護師の自己実現への支援策に対する有効性の評価、の6項目である。健康状態・ストレスに関する項目については、「全く感じない」「あまり感じない」「少し感じる」「とても感じる」の4段階評定、あるいは、「全く思わない」「あまり思わない」「有る程度そう思う」「とてもそう思う」の4段階評定とした。

アンケート結果は、Excelによる単純集計ののち、SPSS15.01統計ソフトを用いた χ^2 検定を行った。

3. 結果

A地区8病院、B地区7病院に計500通のアンケート調査を依頼し、A地区239名(99.6%)、B地区212名(81.5%)から回答をいただいた。年齢・性別の明らかなものを有効回答とし、有効回答率はA地区100%、B地区98.5%であった(表1)。本研究の結果を以下にまとめて記載する。

1) A地区・B地区の看護師の年齢分布が大きく異なっており($p < 0.001$)、A地区では20～30代が8割を占め、B地区では40～50代が6割を占めた。B地区の20代は1割強にとどまった(図1)。

2) 両地区の看護基準・勤務態勢(図2)、夜勤の回数、夜勤で担当する病床数(図3)も大きく異なっていた($p < 0.001$)。

3) 夜勤免除の制度は両地区共過半数で実施されていたが、育児・介護などに伴う夜勤回数の配慮はA地区の実施率が有意に多かった($p < 0.01$)(図4)。

4) パートタイム勤務看護師の採用は、両地区

とも過半数で行われており、実施率はB地区が有意に多かった($p < 0.01$)(図5)。パートタイム勤務に対する評価は概ね良好であり、コミュニケーション不足・責任の所在を明らかにするなどの問題点の対策を講じれば看護師不足の解決策として有効と考えられる。

5) 超過勤務・サービス残業は両地区共に多く、後者が前者より時間数が多い施設が大部分であった。両地区を比較すると、いずれの時間数についてもA地区のほうが有意に多かった($p < 0.05$)(図6,7)。

6) 有給休暇の取得状況は、所定の日数より遙かに少ない取得日数であり、現場に迷惑を掛けたくない・取得しにくい雰囲気などの声が聴かれた(図8)。

7) 勤務のある日の睡眠時間は4割前後の人で6時間未満であった。

8) 心身の自覚的な健康度について、半数前後の人が、心身ともに健康とは思っていないこと、疲れていると自覚している人は8割を占めることが確認された(図9)。

9) 不安、緊張、憂鬱などの精神的ストレスは、新人看護師に限らず、ベテラン看護師にも確認された。

10) 不満・怒りがある、あるいは悲しいと感じる人はB地区がA地区より有意に多かった($p < 0.05$)。自由記述から、一部は職場の人間関係の悩みに由来することが推測された。

11) ストレス要因として挙げられた上位5項目は両地区で一致しており、第1位「超過勤務・サービス残業」、第2位「医療事故への不安」、第3位「勤務時間内の多忙」は、両地区において8割前後の人がストレスに感じていた。第4位は「業務の複雑さ」、第5位は「給与への不満」であった(表2)。年代別に見ると、B地区の30～50代で「患者・家族との人間関係」をストレスと感じている人がA地区の同世代より有意に多かった。B地区の50代では「職場の人間関係」についても同様であった。

12) ストレス軽減策としては、やはり常勤看護師の人員確保、残業手当・昇給、職場の人間関係・配慮について9割前後の人が有効と評価した。その他の項目も過半数の人が有効と評価した。

13) 職務満足度について、過半数の人はあまり満足でない・不満と答え、ほぼ満足以上と答えた人は4割程度であった(図10a)。

14) 生きがいについて、過半数の人がある程度感じていると答えた(図10b)。

15) 研修については、新人研修・プリセプター制度・院内研修は両地区とも9割前後で実施されていたが、中途採用者研修・長期院外研修の支援はいまだ十分ではなかった。クリニカルリーダー導入はB地区で有意に多く実施されていた($p < 0.05$)(図11)。看護協会主催の研修は9割近い人で参加経験があった。B地区では研修を受けたいが困難という人がA地区より多かった。

16) 一般的に、我が国の地域医療における看護師人材確保・自己実現支援の対策として挙げた多くの項目で「試みる価値有り」「かなり有効」との回答であったが、テレビ会議システムによる遠隔地研修、入学試験の地域枠・授業料減免制度・条件付奨学金はB地区で有意に評価が高かった。

4. 考察

わが国の地域医療においては深刻な医療者不足が慢性化しており、平成22年12月に行われた日本病院会のアンケートでは、医師・看護師が不足していると回答した病院は、それぞれ76.8%、73.6%にのぼっている²⁾。厚生労働省の報告書(平成22年12月)によれば、看護職員の需要見通しは、平成23年の140万4千人から平成27年には150万1千人に増加し(6.9%の伸び率)、一方、供給については、平成23年の134万8千人から平成27年には148万6千人に増加するものの(伸び率10.2%)、依然として需要が供給を上回り、看護師不足が解消されないと懸念されている³⁾。地域医療における医療者不足の背景には複数の要因が挙げられる。まず、近年の医療の高度化・専門化、在院期間の短縮化に伴う看護業務のますますの複雑・多忙化が新人看護師の離職を引き起こし、看護師不足の悪循環を来している。第二に、平成16年からの医師の初期研修制度施行に伴い、従来の出身大学附属病院における研修から全国(特に大都

会)の研修病院へと若手医師が再分布した結果、地方大学附属病院の医局医師数・関連病院の医師数の減少を来し、地方の中核病院が病棟閉鎖・閉院に到った事態もおこっている。さらに、平成18年には診療報酬の改定が行われ、地方の中小病院の看護師が他都市部へと転出し、看護師不足がますます深刻化している⁴⁾。石川県においてこの問題を解決するために、本研究成果を、新人看護師についての最近の調査結果⁵⁾とあわせて活用していただければ幸いである。

謝辞

本研究に当たり、ご協力いただいた対象者の皆様、対象医療機関看護部の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 大井山果, 松田愛美, 北村佐和子, 松原 勇, 多久和典子 (2012): 虚血性心疾患の予防を旨とした看護職者による患者指導の研究 — 地域の医療機関を対象とした調査から — 石川看護雑誌 9: 33-42
- 2) 病院の人材確保・養成に関するアンケート調査結果報告 (平成 23 年 10 月): 社団法人 日本病院会, http://www.hospital.or.jp/pdf/06_20111000_01.pdf (2012 年 3 月)
- 3) 第七次看護職員需給見通しに関する検討会報告書 (PDF:385KB) (平成 22 年 12 月): 厚生労働省ホームページ <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000000z68f-img/2r9852000000z6df.pdf>
- 4) 岡戸順一 (2010): 20 代中堅看護師をめぐる職場環境, 看護, 62(6), 46 - 50
- 5) 山崎由美, 川島和代, 諸江由紀子他 (2008): 石川県における新卒看護職員教育および離職への意識に関する実態, 石川看護雑誌 5, 109-117

表 1. アンケートの回収状況

	アンケート配布	回収	有効回答	性別
A 地区	240	239 (99.6%)	239 (100%)	男性 8; 女性 231
B 地区	260	212 (81.5%)	209 (98.5%)	男性 8; 女性 201
全体	500	451 (90.2%)	448 (99.3%)	男性 16; 女性 432

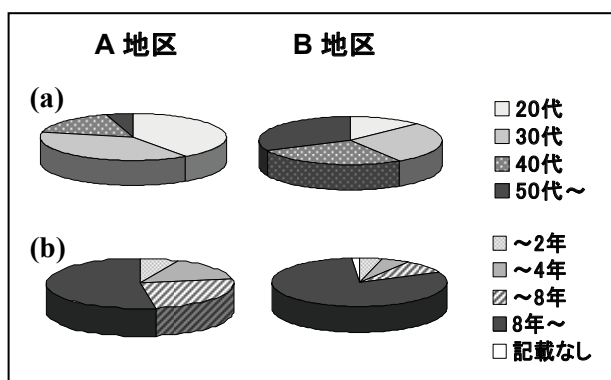


図 1. 対象者の属性 (a)年齢分布 (b)看護師経験年数

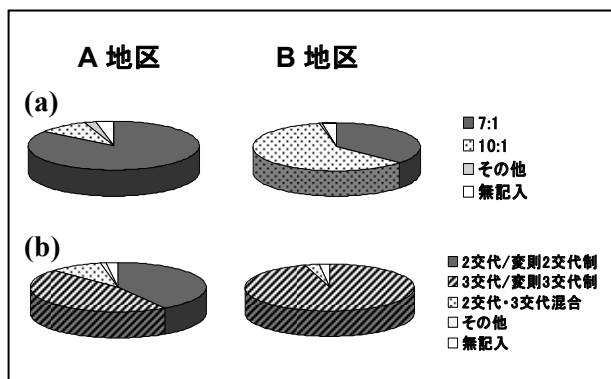


図 2. 配属部署における(a)看護基準と(b)勤務形態

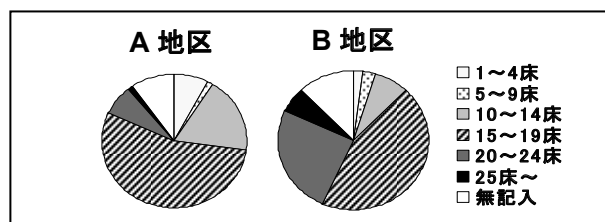


図 3. 看護師 1 人あたり夜勤で担当する病床数

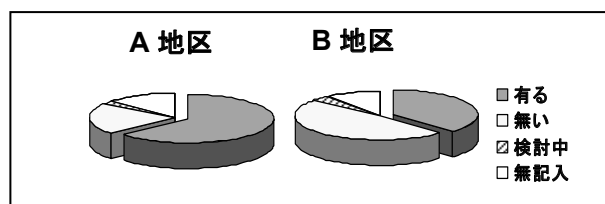


図 4. 育児・介護に応じた夜勤回数の配慮

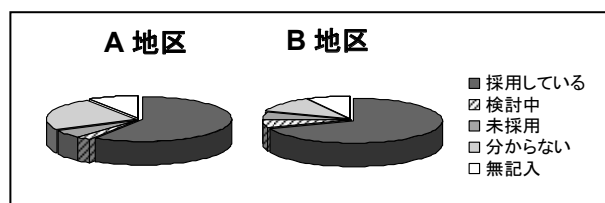


図 5. パートタイム勤務制度の採用状況

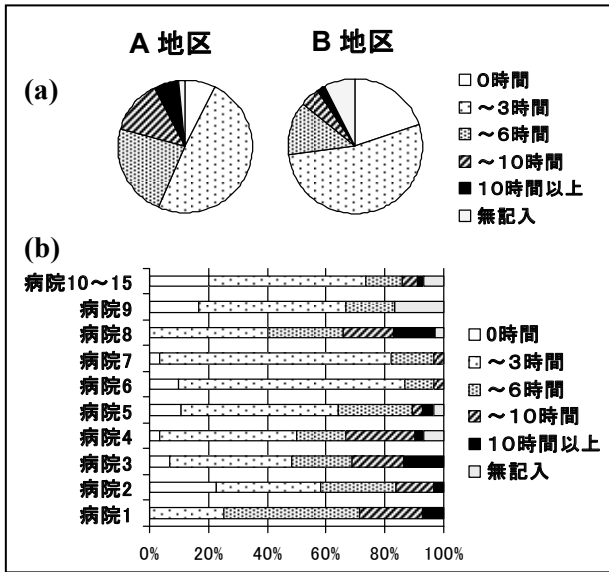


図6. 1週間あたりの超過勤務時間 (a)地区別、(b)医療機関別の集計結果

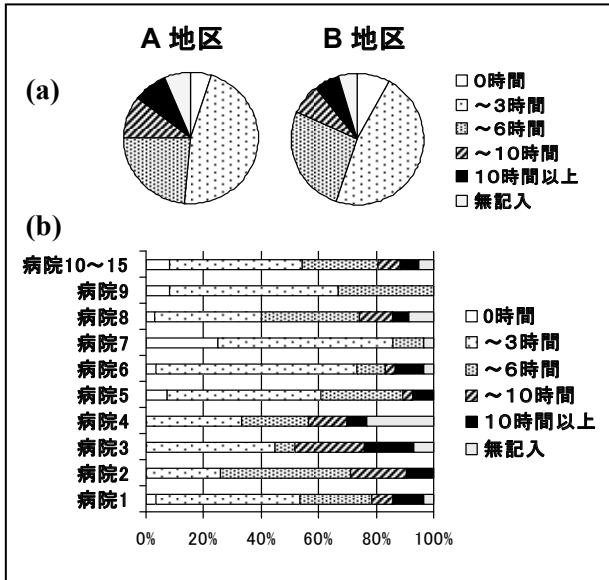


図7. 1週間あたりのサービス残業時間 (a)地区別、(b)医療機関別の集計結果

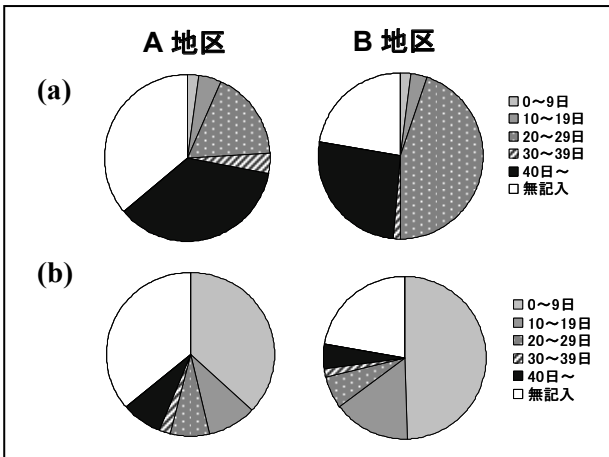


図8. 年次有給休暇の (a)所定日数と、(b)実際の取得日数

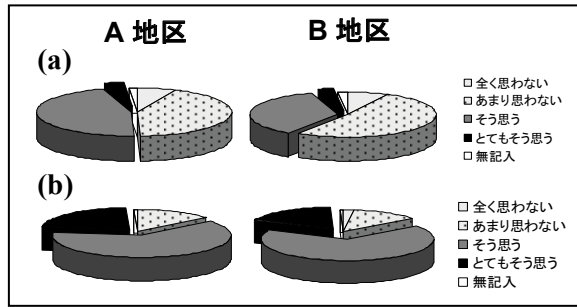


図9. 心身ともに健康である(a)、あるいは、疲れている(b)と答えた人の割合

表2. ストレスの要因 上位5項目

	A 地区	B 地区
1) 超過勤務・サービス残業	77.00%	79.70%
2) 医療事故への不安	75.70%	79.70%
3) 勤務時間内の多忙	74.50%	78.30%
4) 業務の複雑さ	69.90%	72.60%
5) 給与への不満	61.10%	67.90%

「そう思う」「とてもそう思う」と回答した人が占める割合

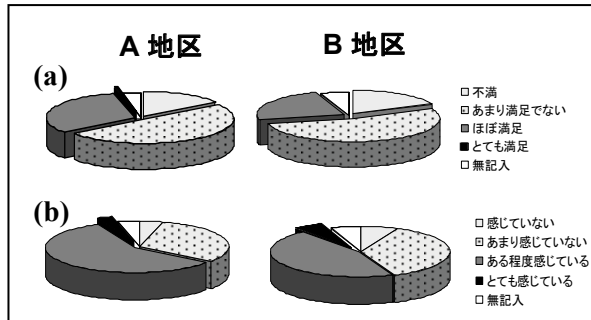


図10. 職務満足度(a)と生きがい(b)

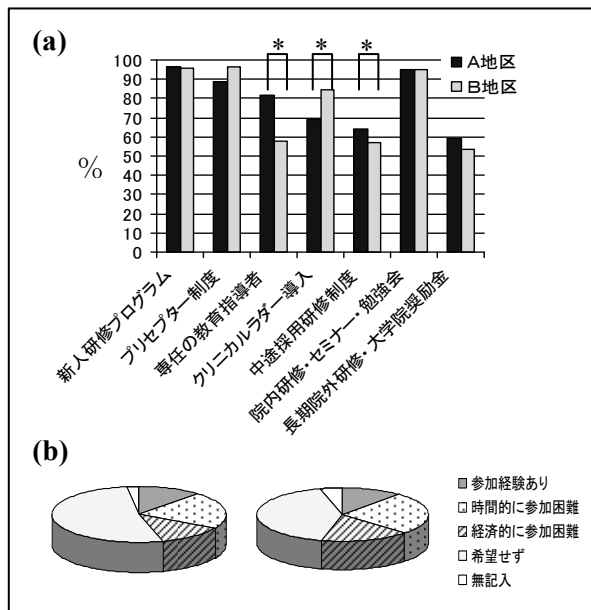


図11. 研修について (a)院内の取り組み (b)資格取得のための長期研修

5-4 パートナーシップを基盤とした Community-Based Participatory Research (CBPR) がコミュニティ能力を向上させるプロセスの評価と理論化に向けた研究

—石川県内の自主グループと協働して取り組む健康増進活動を通じて—

I. 研究概要

1. 研究期間 平成 23 年度～平成 24 年度
2. 研究代表者 彦 聖美
3. 研究分担者 大木秀一（健康科学）
鈴木祐恵（石川県立看護大学研究員）
塚田久恵（地域看護学）
金川克子（神戸市看護大学）
4. キーワード
 1. Community-Based Participatory Research (CBPR)
 2. 男性介護者支援
 3. エンパワーメント

II. 研究経過（平成 23 年度）

1. 目的

本研究では県内の自主グループと協働し、パートナーシップを基盤とした Community-Based Participatory Research（以下：CBPR）による健康増進活動を実施する中で、コミュニティ・エンパワメントの発展およびコミュニティの能力向上に至るプロセスを整理する。併せて、健康課題解決に対する、コミュニティ能力の向上に関わる要因をプロセスとパートナーシップの観点から評価する。さらに、CBPR が地域住民全体に対する基本的な健康増進活動としても有用であることを検証する。以上より、日本においても CBPR が比較的汎用性の高いアプローチとして一般化できることを理論化することを最終的な目的とする。

CBPR は、研究の開始から評価まで全てのプロセスで地域住民と研究者あるいはその他のステークホルダーがパートナーシップを形成し課題に取り組む研究ないしアプローチである。CBPR では、地域住民が自分たちの課題の

認識から、介入の計画・実施・評価まですべてのプロセスに研究者などと深く関わるため、当事者のニーズが活動に十分反映されることが期待できる。さらに、お互いの信頼関係というパートナーシップを基盤とすることで、地域住民と専門職や研究者の相互作用がプラスに働くことが期待できる。この結果、エンパワーメントが促進され、コミュニティ自身が能力を高めることにより、健康課題に対処する力を身につけ、持続的なサイクルの発展に至れば、コミュニティの健康、教育、経済を改善できると予想される。

2. 研究活動の経過（平成 23 年度）

(1) CBPR に関する文献研究・概念・課題の整理

CBPR に関連する文献により、概念整理を行った。

(2) 輪島市の男性介護者の支援に対する Felt Needs を探る

(ア) 背景

近年、妻や親を介護する男性介護者の問題が注目されている。津止^{1,2)}によると、過去40年間で家族を介護する者の続柄は大きく変化している。息子の嫁は大幅に減少し、夫と息子が急増し、高齢期の妻や親を介護する男性が珍しい存在ではなくなっている。男性介護者は孤立しやすく、男性介護者に対する支援が必要といわれている。石川県の高齢化率は23.7%であり、全国(23.2%)とほぼ同じである。しかし、後期高齢化率は全国の11.5%に対して、石川県は12.1%と上回っている³⁾。特に能登地域は、75歳以上人口の割合が高く、高齢独居世帯と高齢の夫婦のみの世帯が増加している地域である⁴⁾。今後石川県全域においても、高齢化率の影響や家族形態の変化により、男性介護者が増加していくことが予測される。現行の介護保険制度の想定している介護者像は嫁や妻であり、男性介護者の増加という現実との間に乖離が生じている^{1,2)}。輪島市の高齢化率は37.2%と高く、男性介護者支援の潜在的なニーズが高い地域であると予測された。

(イ) 方法

- (a) 「男性介護者を地域で支えるシンポジウム in 輪島」を開催し、男性介護者支援のきっかけを作る。
- (b) 男性介護者自身のニーズの把握：シンポジウムの体験談を分析する。
- (c) シンポジウム後のアンケート調査の実施：地域住民に介護者会の立ち上げニーズを探る。
- (d) 男性介護者と語る会の開催：より深い Felt Needs を探る。

3. これまでの結果

(1) CBPR の概念整理

CBPR は 1990 年前後に米国公衆衛生学分野でその概念が整理され始めた地域参加型研究のアプローチである。特に、米国における健康弱者に対する対応手法の 1 つとして環境保健分野から始まり、現在では公衆衛生領域全般さらには隣接領域における多様な課題に応用されている。麻原ら⁵⁾は、CBPR を「コミュニティの健康課題を解決し、コミュニティの

健康と生活の質を向上するために、コミュニティの人々と専門職・研究者のパートナーシップによって行われる取り組み・活動」と定義している。また、大木ら⁶⁾は、「研究の開始から評価まで全てのプロセスで地域住民と研究者がパートナーシップを形成し課題に取り組む研究、ないしアプローチ」と定義して、その汎用性についてまとめている。

健康増進活動を推進していく際、個人の健康に個別にアプローチするだけでは限界があり、集団の健康問題をもたらす「社会的決定要因」に働きかける必要がある。そのため、アプローチには当事者であるコミュニティの人々の生活や文化を深く知ることが不可欠となる。コミュニティの人々を理解するための有効な方法としては、当事者の中に入り、共に活動する Participatory action research が基本となる。CBPR で重視する住民・行政・研究者などを含んだ関係者とのパートナーシップは、住民のエンパワーメントからコミュニティのエンパワーメントへと発展していく。これは、コミュニティの課題を自ら把握し改善していく力量であるコミュニティ能力を向上させる取り組みといえ、CBPR の大きな成果となる。地域住民の自主グループは必然的に内発的・ボトムアップに発展する可能性があり、さらにトップダウンの政策とのバランスをとりながら CBPR はパートナーシップの構築と維持を生み出す仕掛けとして機能する。

CBPR のプロセスは、①健康問題のおおよその明確化、②組織作り、③健康問題の特定、④プログラムの計画と実践、⑤プログラムの評価、にまとめられる。CBPR は、①健康問題の解決、②CBPR 参加者の能力の向上、③コミュニティのパートナーシップの発展、④コミュニティの資源の開発と維持、という視点で評価がされる。このように、CBPR は反復・循環しながら、拡大・発展し続ける終結のないプロセスであり、発展し続けるコミュニティを目指すことを目的としているとまとめられる^{5,6)}。

- (2) 輪島市の男性介護者の支援に対する Felt Needs を探る

(ア)「男性介護者を地域で支えるシンポジウム in 輪島」の開催

輪島市地域包括支援センターと企画から実施までを協働し、シンポジウムを実施した。2011年7月24日(日)13:30～15:30、輪島市文化会館3階大会議室にて「男性介護者を地域で支えるシンポジウム in 輪島」を開催した。シンポジウムは二部構成で実施し、第一部(50分)は講演者による「妻の介護体験を通して社会に求めるもの」と題した講演と質疑応答、第二部(60分)では、シンポジストは「私の介護体験・地域住民に望むこと」と題して1人10分の講演を行い、その後、会場との意見交換を行った。シンポジウムの第一部、第二部の座長は、事前に講演者とシンポジストの講演原稿の確認と打合せを行った。特に初めての講演となるシンポジストの語りたい内容が、十分に引き出せるように会場との意見交換等、進行には十分に配慮した。

参加者は124名、参加者の居住地域は、輪島市が83%、その他珠洲市、穴水町、能登町、志賀町、羽咋市より参加があった。

(イ)シンポジストの体験談の分析

男性介護者自身のニーズの把握するため、講演者と3名のシンポジストの講演内容と質疑応答の内容を録音し、録音内容を全て逐語録に起こした。この逐語録からニーズに関連する内容を、意味のまとまりごとに見出しを付けて整理し、その内容をもっとも表現している言葉を生かしてデータとした。類似したデータの内容を集め、サブカテゴリー、カテゴリーへと分類を進めた。講演者とシンポジストに対して、シンポジウムにおける講演の録音の承諾を得た上で、公表に際しては、①個人情報 の匿名化、②研究公表時の配慮、③データの保護・管理、④害・不利益を与えないこと、⑤研究参加の自由を説明し、書面に同意を得た。

その結果、男性介護者が求めるニーズとして、①介護技術や家事のやり方に対する支援、②他者からの支援(家族、友人、近所の住民、サービス担当者、保健・医療・福祉専門職者)、③当事者同志の交流、④何か変化があったときのための環境の整備、⑤情報の周知、⑥適

切なサービスの導入が挙げられた。

(ウ)シンポジウム後のアンケート調査

シンポジウムの参加者に対し、アンケートを実施した。アンケート調査回答者は79名(男27名・女52名)、回収率は63.7%であった。シンポジウム内容の理解について4段階評価の結果、「よくわかった」「わかった」を含めると69名(87%)であった。男性介護者の会の設立を希望する人は11名(14%)であった。今後聞きたいテーマについては、「介護者の健康を保つアドバイス」、「地域で支え合うようなチーム作り」、「認知症介護」、「料理に関すること」、「介護体験、困った時に切り抜ける事が出来た体験」などが挙げられた。

(エ)男性介護者と語る会の開催

2011年11月29日(火)13:00～15:30、輪島市ふれあい健康センターにて「男性介護者と語る会」を開催し、男性介護者のより深いFelt Needsを探った。

参加者は、輪島市在住の男性介護者4名、輪島市保健師1名、輪島市男性職員(社会福祉士)1名、看護大学から2名であった。そこで男性介護者から語られたニーズは、以下にまとめられた。

(a)知識や介護技術支援：介護の工夫(おむつ交換)、認知症の対応、料理の方法、介護者の息抜き方法など。

(b)精神的支援：自身の健康不安・先行きの不安、徘徊する母親に苛立つ自分との葛藤などに対する精神的な支援が求められていた。

(c)他者からの支援：近所の住民の協力と励まし、温かい言葉が介護生活の励みとなるので、必要である。

4. 考察と今後の課題

「男性介護者を地域で支えるシンポジウム in 輪島」では、輪島市とその近隣の奥能登地域からの参加者が多く、現在介護されている地域住民、介護に関心のある地域住民、民生委員、ケアマネジャーの方々が熱心にシンポジウムに参加し、奥能登地域における男性介護者支援に対する社会的関心の高さが伺われた。しかし、シンポジウム後のアンケート調査結果では、男性介護者の会の設立を希望

する人は11名(14%)であり、交流の場に対するニーズは、多くはなかった。今後聞きたいテーマについては、地域住民も具体的な介護における対処方法に対する支援を求めている。当事者のニーズも同様に、知識や介護技術支援のニーズ、相談できる場などの精神的支援のニーズ、他者からの支援のニーズ、情報の周知、周辺環境の整備に対するニーズにまとめられた。

得られた Felt Needs を基に、次年度以降の具体的支援としては、介護技術を学ぶ場、情報を得る場を設けることが望まれる。特に、認知症の対応について学ぶことは、介護者の精神的支援にも繋がると考える。男性介護者同士の交流の場や地域社会とのつながりの強化も重要となる。また、男性向けの料理教室など、住民の介護に対する準備性を高めるような活動を展開し、一般市民も巻き込んだ活

動へと発展させながら、地域全体で介護者を支える力を強化していくことが必要である。

今回の方法論のように、コミュニティ(輪島市)と研究者の企画からの協働はコミュニティの慣習・住民の特性に添った実践活動に結びつく効果が大きかったと考える。例えば、地域新聞のチラシを活用した広報活動を導入するというアイデアを受けて実施できたことは、地域住民に対する情報の周知に繋がった。CBPR で重視する住民・行政・研究者などを含んだ関係者とのパートナーシップは、コミュニティ全体のエンパワーメントへと発展していくことが期待できる。今年度は地域住民の参加が十分に得られなかったが、次年度以降は、地域住民を活動に巻き込みながら、男性介護者の自主グループ作り、地域住民のエンパワーメントに向けた取り組みへと発展させていくことが課題となる。

文献

- 1) 津止正敏：家族介護支援のリアリティー男性介護者研究からの提言ー。高齢者虐待研究。5(1)：32-38 (2008)
- 2) 津止正敏, 斉藤真緒:男性介護者白書ー家族介護支援への提言ー。かもがわ出版。7-109(2008)
- 3) 石川県人口動態統計(平成23年度)：いしかわ統計指標ランド；<http://www.pref.ishikawa.lg.jp/kenkou/14toukei/index.html>.
- 4) 平成22年国勢調査人口等基本集計結果(石川県関係分)：
http://toukei.pref.ishikawa.jp/d1/2332/H22census_jinkou_kaisetsu.pdf.
- 5) 麻原きよみ他, CBPR研究会:地域保健に活かすCBPR コミュニティ参加型の活動・実践・パートナーシップ。医歯薬出版株式会社(2010)
- 6) 大木秀一, 彦 聖美:Community-Based Participatory Research (CBPR) :その発展および社会疫学との関連。石川看護雑誌.8:9-20 (2011)

5-5 セルフヘルプグループを基盤としたサポートネット ワークシステムのエンパワーメント効果に対する実証 と理論化の研究

I. 研究概要

1. 研究期間 平成22年度～平成23年度
2. 研究代表者 大木秀一
3. 研究分担者 彦 聖美（在宅看護学）
谷本千恵（H22）（精神看護学）
志村 恵（H23）（金沢大学人間社会学域）
河原廣子（H23）（NPO 法人かもママ）
天羽千恵子（H23）（兵庫セルフヘルプ支援センター）

4. 研究発表

平成22年度

- 総説：大木秀一、彦 聖美：Community-Based Participatory Research (CBPR)：その発展
および社会疫学との関連。石川看護雑誌、8、9-20、2011
大木秀一：特集 多胎育児の支援とポイント。チャイルドヘルス、13(10)、3、2010
大木秀一、彦 聖美：多胎出産の動向とこれからの多胎育児支援。特集 育児の支援
とポイント。チャイルドヘルス、13(10)、4-7、2010
彦 聖美、大木秀一：海外における多胎育児支援。特集 多胎育児の支援とポイント。
チャイルドヘルス、13(10)、42-43、2010

平成23年度

- 総説：大木秀一：多胎児の親に対する支援 — 「日本多胎支援協会」立ち上げの立場から—。
母性衛生、52(1)、50-55、2011
資料：彦 聖美、大木秀一：セルフヘルプ・クリアリングハウスの歴史と機能およびその果
たす役割と今後の発展に向けた課題。石川看護雑誌、9、109-119、2012
保健活動レポート：大木秀一、彦 聖美、志村 恵、河原廣子：地域の子育て支援拠点を対象
にした多胎育児支援の研修事業。北陸公衆衛生学会誌、38(1)、19-23、2011
学会発表：大木秀一、彦 聖美：Construction and Activities of Support Network for
Families with Multiples in Ishikawa Prefecture, Japan: Community-based Participatory Research.
第2回日韓地域看護学会共同学会、2011.7.18（神戸）

5. キーワード

1. セルフヘルプグループ
2. セルフヘルプ・クリアリングハウス
3. 支援ネットワーク
4. エンパワーメント
5. コミュニティ

II. 研究成果

1. はじめに

これまでに、実践研究として当事者主体の多胎育児支援グループの連携と多職種の協働による全県的なサポートネットワーク（いしかわ多胎ネット）を構築し、組織的なピア

サポート活動の効果の評価などを行った。当事者を主体とした比較的小規模な支援グループ（セルフヘルプグループ：SHG：self-help groups）を連携し、多職種を巻き込んだ支援ネットワークのシステムを構築するプロセス

は、多胎育児支援に限定されたものではない。SHGは元来、人的にも経済的にも脆弱である。従って、SHGを連携した組織は、健康に関連する共通の問題や課題を特化した場合の中間支援組織として機能しうる。

当事者主体の支援組織は内発的・ボトムアップに発展し、従来のトップダウン式の保健医療組織と相補しながら、新たな支援方法を創出しコミュニティをエンパワーメントする有力な社会資源となりうる。地域住民のSHGを連携し、専門職とゆるやかなネットワーク組織を築く中で、メンバー個人も組織もエンパワーメントされる。

こうしたネットワークは地域の活性化につながり、今後の保健医療行政・施策、医療経済の在り方に少なからぬ影響を及ぼすことが期待できる。しかし、そのためには当事者主体のグループがコミュニティレベルの支援システムネットワークへと至るプロセスについて、その基本的な概念をまとめあげる作業が必要である。

本研究では、SHG、支援ネットワークの実態を把握した上で、当事者、業務専門職（医療・行政）、研究職のそれぞれの立場から活動のケア効果と課題を整理する。また、組織の発展過程を整理する。以上を通じ、SHGが保健医療福祉あるいはケア科学にいかに関与するかの概念の理論化を試みる。研究者はメンバーとして組織に参加し、様々な研究理論を応用しながら、組織の発展プロセスを観察し、記録を言語化し、分析することで、より汎用性・応用可能性がある方法論を提言できる。

2. 研究経過

具体的な方法として、以下の4点を実施した。

(1) SHGとサポートネットワークシステムに関する文献研究・概念・課題の整理

これまで発表された国内外のSHGとサポートネットワークシステムに関連する文献の網羅的な把握により、概念整理を行った。

(2) 成人保健（生活習慣病）のSHGや支援ネットワークの実態把握

糖尿病は生活習慣病の中でも特に自己管理が必要であり、長期にわたり疾病と生活の折り合いが重要な疾患である。これまで患者会

の歴史が長く、活動が比較的ネットワーク化されている疾病である。そこで、石川県内で活動する糖尿病患者会の実態について、郵送式質問紙調査を実施した。

日本糖尿病協会では情報公開されている「友の会」のうち石川県内の糖尿病患者会と、日本糖尿病協会石川県支部の計18患者会を対象とした。日本糖尿病協会は、1961年に結成された会である。各都道府県に支部を持ち、約1,500の「友の会」がある。石川県内には「友の会」以外の患者会がないことを、県の担当者、病院関係者、県理学療法士会等に問い合わせ、確認してある。

調査は、2011年1月～2月に実施した。倫理的配慮としては、調査票の郵送時に、書面にて研究目的・方法・研究の意義・研究参加の自由・情報の厳重な管理等について説明し、返送をもって同意を得たものとした。

調査項目は、会の成り立ちの基本的要素（会の発足経緯、構成員、運営など）や自発的参加あるいはボランティアリズム、状況の共通性について尋ねた。その他に、会の活動内容（体験の共有、機関紙、相談機能など）やネットワークの状況についても尋ねた。初回発送後、未回収分に対しては再依頼を実施した。

(3) いしかわ多胎ネットの活動記録の分析

石川県内における多胎育児家庭のサークル（SHG）を中心としたネットワークであるいしかわ多胎ネットの7年間（2005年2月～2012年2月）の活動内容（記録）を整理し、さらに活動に関与した当事者・専門職の証言をもとに事後的に分析した。組織（集団）のエンパワーメントにつながった出来事を抽出し、一般化した。

(4) セルフヘルプ・クリアリングハウスの概念の整理と視察

SHGの活動が活発な欧米では、SHGの活動を総合的にサポートする組織が活動を行っている。こうした組織をセルフヘルプ・クリアリングハウス（SHC: self-help clearinghouse）と呼ぶ。SHCは、地域の活性化、コミュニティ再生につながり、今後の保健医療行政・施策に少なからず影響を及ぼすと思われる。しかし、国内ではSHGの成立を支援し、その運営に対して側面的な支援を行う活動は十分では

ない。SHGの支援やネットワーク化に関する報告は少なく、SHGに対する支援の現状は明らかでない。以上を背景に、論文や書籍に基づきSHCの概念を整理するとともに、実際にSHCを視察し、情報収集を行った。

3. 研究成果

(1) SHGの文献研究・概念・課題の整理

健康に関連する共通の問題や課題、悩みを抱えた当事者の自発的参加と意思の共有で、SHGが形成されることを確認した。複数の同種・異種のSHGがつながり、多職種がゆるやかに連携・協働することでコミュニティにおけるサポートネットワークシステムが構築される。その形成プロセスは、内発的発展論とエンパワーメント理論にも通じていた。

SHG研究の課題を概観すると、学術的研究が少ないことに加えて、SHGそのものの定義や機能・構造、役割などが曖昧であることが挙げられた。SHGを区別する視点としては、当事者性の程度、専門職のかかわり方、疾患・障がい・生活（健康）に関連する課題の定義、組織規模、活動範囲などが挙げられ、これらを明確に区別することは難しかった。

(2) 石川県内で活動する糖尿病患者会の実態調査

対象18会中、返信数は15会（回収率83%）であった。会の運営主体は、7割以上が病院であり、活動を10年以上継続している会が10会存在した。会の代表者は患者が多いが、会の設立者は患者以上に医師が多かった。会の運営には、患者の家族や多くの職種が参加していた。現在、連携して活動している全国組織を持つ会が11会、石川県内の組織と活動している会が12会であった。

(3) いしかわ多胎ネットの活動内容の整理

7年間で、22回の講演会・交流会（金沢地区10回、能登地区6回、加賀地区6回）、56回の幹事会を行った。広報活動として、ニューズレターの発行（12回）、石川県子育て支援メッセへの出展（4回）を行った。人材育成として、ピアサポーター養成講座（13回）、事後報告会・事例検討会（12回）、ファシリテーション研修会（2回）を行い、「訪問型」「サークル型」「ひろば型」のピアサポート活動（派遣事業）で

延べ約400人を派遣した。支援普及事業として、プレママパパ・多胎育児教室（7回）、一般育児支援研修会（2回）を実施した。

(4) セルフヘルプ・クリアリングハウスの概念の整理と視察

日本のSHCは、1990年代に「セルフヘルプ支援センター」という名称で運営が開始され、現在は全国で12のセンターが活動していた。SHCは、SHGの情報を収集し、その活動や立ち上げを支援し、SHGに自由な交流の場を提供していた。SHCの機能をまとめると、情報・技術・啓発の3領域に大別された。役割としては、①価値観と情報の多様化と広がりをもたらす役割、②組織や人をつなぐ媒介としての役割、③一般市民・専門職者に対する啓発、にまとめられた。今後の発展に向けた課題は、スポンサーと財源を確保し、SHGの主体性、平等性、応答性の原則に応えた活動を進めることであった。現実の支援センター運営には様々な人的・経済的課題があると思われた。

4. 考察

(1) SHGや支援ネットワークにおける専門職のかかわり方の課題

専門職は、研究職（大学職）と業務専門職（医療職・行政職など）に大別される。研究職は、①コーディネート、②学術的知見の提供、③経験の言語化（暗黙知・実践知を形式知へ）などの重要な役割を担う。しかし、同時に大学人による「支配」や「美化」の危険性も併せ持つ。業務専門職は、個人レベル（個別事例）の対応に偏る傾向が強く、業務の中で支援を捉えすぎると、課題解決に向けた本質的・全体的な支援が難しくなる。健康に関連する、重要だが気がつきにくい問題や課題に対する支援には、地理的な行政区分と職種を越えた隙間のない支援を可能にするネットワークの構築が求められる。

(2) 糖尿病患者会活動の効果と課題

糖尿病患者会は、糖尿病の治療と日常生活という「共通の課題」を持つ。グループの活動には「活動目的・目標」、「会則」という共通のゴール・ビジョンがある。「対面的相互関係」として、極めて組織的な運営がなされている。しかし、「対等な関係」という点におい

ては、医療職主導の側面が強く、「自発的参加」と「主体性重視」という側面は弱かった。これは、患者という立場の弱さや、糖尿病患者であることを隠す傾向が強いという疾病特性が影響しているからだと考えられた。「専門家との多様な関係」としては、糖尿病がチーム医療の先駆的な取り組みを行ってきた経緯から、活動には多職種の参加があることが糖尿病患者会の特徴の1つである。

SHGの機能的側面には、働きの要素として「わかちあい」、「ひとりだち」、「ときはなち」の概念がある。糖尿病患者会の「わかちあい」における活動としては、定例会、シンポジウム、体験発表会、小グループでの話し合いの場、などが当てはまる。また、機関紙の発行、ホームページの開設、電話等の相談事業など社会に向けた活動が見られた。「ひとりだち」に関しては、自主グループがほとんどみられない実態から、自己決定や社会的参加の側面は弱いと思われた。「ときはなち」の概念における自尊感情の回復やエンパワーメントも、現実には困難が多いと思われた。

患者会同士の連携は機械的連携であり、実際には所属する病院が主体のトップダウンの活動であった。これは、糖尿病という疾病特徴から、患者会は「治療」としての意義が大きいからだと考えられた。患者会活動を、様々な組織と連携して地域ネットワークとして定着させることで、地域のエンパワーメント効果が期待できるだろう。

(3) いしかわ多胎ネットの活動記録から見えてきたこと

ピアサポート活動に関しては、①当事者と専門職の役割の明確化、②受けた側も提供する側もエンパワーメントされる、③組織も成長する(組織のエンパワーメント)、④情報が集約され、地域の社会資源となる、⑤受けた側が将来的に提供する(循環型支援)、⑥妊娠期からの早期介入が有効、⑦行政、医療機関との連携が必須(連携の促進)などの効果が見られた。

組織全体としては、①断片的な支援が継続的な支援となる、②情報の偏りが情報の多様性や情報の交換につながる、③地域格差が地域の特性として捉え直される、④サークルリー

ダーなど一部の人への負担の集中(によるバーンアウト)からリスクの分散に向かう、⑤特定の課題のみで自己完結していた支援活動が発展的に拡大する、⑥資金獲得が以前より容易になる、などの効果が見られた。

このようなネットワークは全国組織と地域に点在するSHGの中間支援組織として位置づけられる。

(4) セルフヘルプ・クリアリングハウスに関して

SHCは多くのSHGを組織的に支援する。その結果、必然的に異なる問題や課題を持った当事者間の交流が起これ、個々のSHGでは獲得しえない多くの情報の収集と提供、支援技術の提供と開発、社会に対する啓発の機能を持つことになる。日本では、SHGそのものに対する理解が少ない上に、SHCの活動や意義はほとんど知られていない。SHCの活動は専門職主体の従来の支援体制とは異なる役割を持っている。日本におけるSHCは発展途上で課題も多いが、専門的な支援体制と補完することで、保健医療福祉の分野において新たな支援の方法を提供することが期待できると思われた。

5. 今後の課題

当事者主体の組織や活動は、抱えている健康に関連する問題や課題により様々であり、必然的に医療や行政への依存度も異なる。当事者組織は特化した課題の解決だけに向かいやすいが、様々な課題をもつ当事者組織が出会う場を意図的に作ることは、新たな解決策やヒューマンネットワークを構築する機会となる。

個人が社会的な不適応に陥ってから解決策を模索するのではなく、不適応に陥りにくい地域社会の実現を目指す予防的アプローチの開発が必要であろう。そのためには、複雑に相互作用しあう、社会システムと個人とを結びつけるプロセス全般についての研究が必要である。この結び付きを、概念的かつ実践的に解明することにより、個人・集団、社会の生態学的な重層構造がよりよく機能するような活動計画の基礎が提供できるといえる。

6 そ の 他

6-1 かほく市と石川県立看護大学の包括的連携協定締結記念事業 「認知症にやさしいまちづくりシンポジウム」の実施

地域ケア総合センター センター長 川島和代

1. かほく市との包括的連携協定の取り組みの概要

本学は、地元かほく市とのより密接な連携を図り、学生が地域の住民の温かなまなざしの中で学び、育まれる環境づくりとともに、大学教員の教育・研究活動をかほく市の支援を得て実施、その成果をかほく市の活力ある個性豊かな地域づくりに寄与できるようにとの趣旨で、平成22年10月に包括的連携に関する協定を締結した。

連携協力事項として、協定書の中では「(1)保健及び福祉の向上に関する事項、(2)大学の教育及び学術研究並びに社会活動の推進に関する事項、(3)教育、文化及びスポーツの発展並びに振興に関する事項、(4)地域コミュニティの発展に関する事項、(5)その他、この協定の目的を達成するために必要な事項」と定められている。平成23年度は、かほく市と大学双方から連携できる事業を提案して取り組んできた。看護大学は市民の健康づくりや高齢者支援、子育て支援、模擬患者のボランティア組織の育成など 12事業を、かほく市からは市民の健康づくり、地域コミュニティづくり、学生への助成制度など 23事業の提案があった。年3回の協議会を開催し、新規事業の提案、双方の窓口担当者を決め、進捗状況を確認しながら進めている。

2. 「認知症にやさしいまちづくりシンポジウム」の取り組みまでの経緯

本年は、かほく市と石川県立看護大学の共催、総務省・石川県の後援を得て、包括的連携協定締結記念事業・看護大学祭企画「認知症にやさしいまちづくりシンポジウム」を実施した。

認知症を取り上げたのは、かほく市における要介護認定とされている方の3人に1人が認知症と診断されており、年々増加の傾向にあるが、たとえ、認知症と診断されても周囲の人たちが認知症を正しく理解し、認知症であっても最期まで住み慣れた自宅で自分らしく暮らせる、住みやすいまちづくりをめざしたいと考えたからである。また、本学創立時から本学の専任教員が認知症の理解を広げ、自らも予防活動に取り組む住民ボランティア『いちご会』を育成・支援している実績があること、さらには、大海小学校の子ども達と本学学生が授業の一環として認知症の勉強会を継続してきていること等より、地域の中にこれらの取り組みの成果を還元し、住みやすいまちづくりに生かせると考えた。

3. 「認知症にやさしいまちづくりシンポジウム」の実施

平成23年10月30日(日)に、本学講堂を会場として実施した。同日は、看護大学祭の日でもあり、定員450名のところ、500名を超える参加者が得られた。

内容は、二部構成とし、第1部のオープニングは実行委員長のあいさつ、かほく市長・石垣学長のあいさつで始まった。タレントで画家でもある城戸真亜子氏に基調講演(テーマ「心をつなぐ介護日記」)を依頼し、認知症のあるご家族との心温まる生活ぶりを城戸氏自身の描かれた絵を用いてお話頂いた。第2部では、特別レッスン「認知症を理解しよう」として認知症理解の啓発のために講義を企画した。講師は、石川県認知症疾患医療センター所長北村立氏であった。テンポの良い講義に会場の参加者の笑い声が絶えなかった。その後、パネルディスカッション「住んでみたいかも、認知症にやさしいまち」を行った。司会・進行は、八森敦氏(地域医療振興協会市立伊東市民病院 臨床研修センター長)と中道淳子氏(本学老年看護学講師)がつとめた。パネリストにはかほく市の老人クラブ連合会、大海小学校教諭、認知症予防ボランティア「いちご会」の方々をお願いし、ご自分達の活動の取り組みとその後

の変化について紹介頂き、会場との討論を行った。

この会場で、「認知症にやさしいまちづくり」のシンボルキャラクターとしてかほく市の「オレンジリングのにゃんたろう」が紹介された。認知症予防や認知症理解のための啓発事業として第一歩を踏み出すことができたと考える。

本事業に取り組む上で特筆すべきことは、かほく市行政・各種団体、看護大学教職員・学生のすべてが集い、実行委員会形式で取り組んだことである。地域の市民一人一人と知り合え、顔と顔をつき合わせて、ともにまちづくりを考える得がたい機会となった。包括的連携協定締結の成果の一つであると考えられる。

実行委員会メンバー紹介(地域住民の方々)

<p>民生委員 児童委員協議会 喜多さん</p> 	<p>老人クラブ連合会 南さん</p> 	<p>いちご会 清水さん</p> 	<p>各種女性団体 連絡協議会 藤田さん</p> 
<p>看護大学大学祭実行委員 山本さん・河合さん</p>  		<p>大海小学校 山下校長先生</p>  	

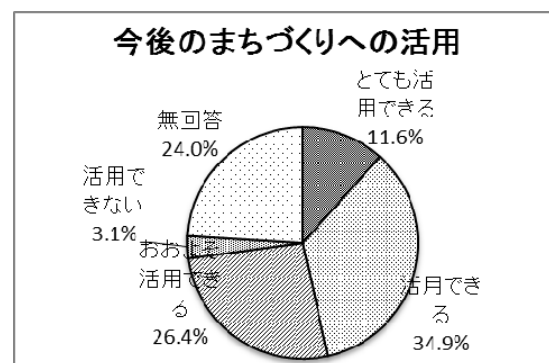
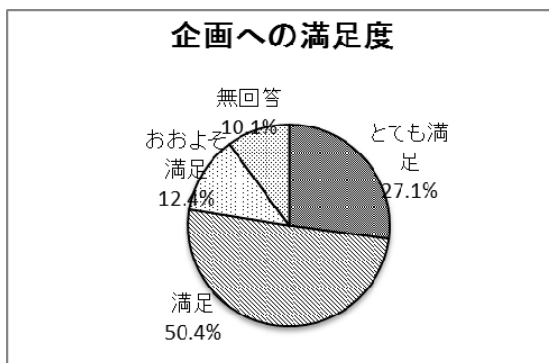
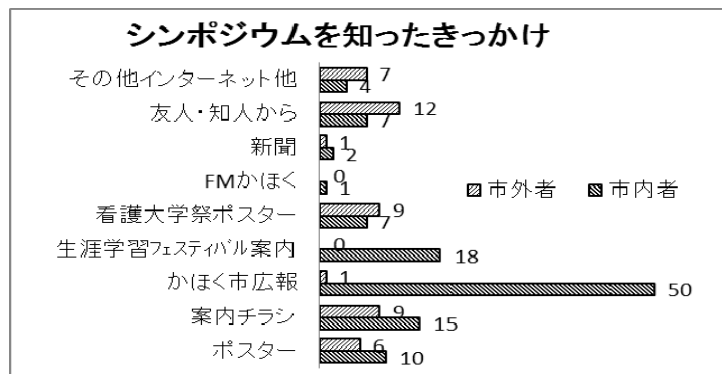
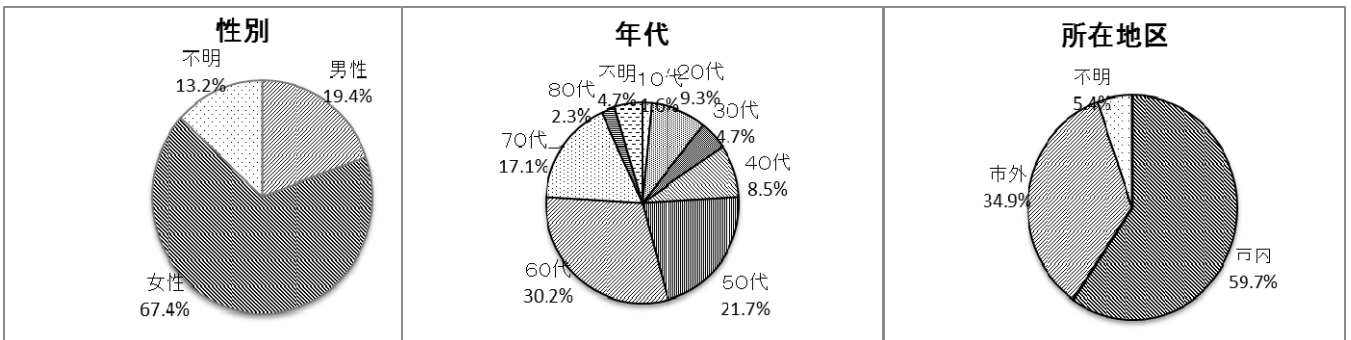
実行委員会メンバー紹介(地域の専門職)

<p>河北郡市 医師会: 沖野先生</p> 	<p>河北支部 介護支援専門委員 (ケアマネージャー): 元女さん</p> 	<p>認知症疾患 医療センター (高松病院): 北村先生</p> 	<p>若年性認知症の 人と家族の会: 中村さん</p> 	<p>かほく市 社会福祉協議会: 川口さん</p> 
<p>石川県立看護大学 砂山さん、川島先生、中道</p> 			<p>かほく市 竹田保健師・松本市民部長・吉野介護予防課課長 藤田保健師・中田生涯学習課係長</p> 	

4. 「認知症にやさしいまちづくりシンポジウム」の評価

(かほく市まとめ分を抜粋・一部改変)

- 1)参加者：約 500 名（450 名定員＋補助椅子 50 脚）
- 2)参加者の内訳：年代では 50・60 歳代が過半数、性別では男性 2 割、女性 7 割、かほく市内在住者 6 割、市外在住者 3 割強、介護事業従事者も見受けられた。
- 3)シンポジウムへの満足度:いずれの内容にも「満足」あるいは「わかった」との回答が 7 割以上であった。基調講演では体験に基づく城戸真亜子氏の話に共感できたという意見が多く、北村先生の認知症についての講演では楽しくわかりやすかったが、時間が短かったという意見、パネルディスカッションでは各種団体の活動内容が理解できてよかったという意見が多かった。また、今後のまちづくり・企画への意見等も多く記載されていた。
- 4)シャトルバスの運行：7 往復運行、看護大学への乗車数 23 人、生涯学習フェスティバル会場への乗車数 25 人であった。看護大学の駐車場・大学前の市有地にも駐車スペースを確保した。
- 5)その他：シンポジウムに併せて、看護大学祭も盛況であった。反面、同日開催していたかほく市生涯学習フェスティバル会場には人が閑散としていたとの苦情も受けた。



6-2 石川县委託事業 石川県看護教員養成講習会の開催

地域ケア総合センター センター長 川島和代

1. 開催までの経緯

看護専修学校等の教員の確保は、高い知識と技術を持った看護職を輩出する上で、重要な課題であるが、北陸地域に教員養成講習会が久しく開催されておらず、将来の看護教育の担い手を育てるための講習会開催が石川県看護教育機関協議会等から石川県の看護行政へ強く求められていた。

平成 21 年度末には、石川県看護教員養成講習会を平成 23 年度より 3 年間にわたり実施することが決定し、本学地域ケア総合センターが石川县委託事業として引き受けることとなり、平成 22 年 7 月にセンター内に準備室を立ち上げた。教育担当者として南美知子氏（前独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター看護部長）を迎え、教員養成講習会開催に向けて準備全般をお引き受け頂いた。

平成 22 年 8 月には石川県健康福祉部が関係団体に本講習会の企画・運営に関する意見を聞くために、「看護教員養成講習会検討委員会」を設置し、本学丸岡教授が座長を担当することになった。

本学内に「看護教員養成講習会運営会議」を設置し、センター長はじめとした本学の専任教員 6 名、石川県健康福祉部医療対策課参事、本学教務学生課長、その事務局として県健康福祉部医療対策課主査ならびに事務員 1 名の体制を組織した。平成 22 年度の準備段階では、5 回の運営会議を開催し、「専任教員養成講習会及び教務主任養成講習会ガイドライン（厚生労働省）」に沿って、教育カリキュラムの構築、授業科目案の編成、講師の選定、時間割作成、実習施設の確保等を行い、厚生労働省に講習会開催の報告を行った。並行して、講師会議の開催、受講生の募集要項の作成、募集、受講生の選抜を行い、平成 23 年 4 月 27 日に 32 名の受講者を迎え開講に至った。

この間、北陸 3 県（富山、石川、福井）の看護行政担当者や看護教育機関の多大な支援を得て開催の運びに至ったことは、看護教育の現場の熱意とそれに応えようとした本学教員の協力体制の構築の賜物である。

2. 平成 23 年度看護教員養成講習会の運営と修了生の輩出について

平成 23 年度は、873 時間の授業時間ならびに延べ 70 名近くの講師に教育を担っていただいた。また、教育実習校として石川県 4 校、富山県 4 校にお引き受けいただいた。

6 回の「看護教員養成講習会運営会議」、1 回の「看護教員養成講習会検討委員会」を開催して講習会の運営や教育内容・方法等について審議頂いた。延べ 20 回近い講師会議を企画し、それぞれの科目の内容やすすめ方について検討頂いた。

32 名の受講生を迎え、途中 1 名の受講辞退があったが、8 ヶ月の講習会終了時には 31 名の修了判定が行われ、12 月 20 日に石川県健康福祉部木下部長の下、修了式を挙行了した。

受講生からの評価では講習会に対して概ね高い満足が得られたが、受講生同士の切磋琢磨、支えあい、教育担当者の心身両面にわたる大きなサポート体制が講習会運営上、重要であることが再確認できた。

3. 今後の課題

今後の課題として、本学学内の教育設備の充実（受講生が使用しやすいコピー機の設置、パソコンの数の確保他）、受講生のメンタルサポート、教育実習施設の確保、継続教育の検討、引き続きの受講生の確保等が挙げられた。また、教育カリキュラムの見直しの中で講師交代・追加等の検討も行われた。

6-2 石川県協力事業 介護職員によるたんの吸引等の研修事業の実施協力

地域ケア総合センター センター長 川島和代

1. 開催までの経緯

平成 24 年 4 月から「社会福祉士及び介護福祉士法」（昭和 62 年法律第 30 号）の一部改正により介護福祉士及び一定の研修を受けた介護職員等においては、医療や看護との連携による安全確保が図られていること等、一定の条件の下で『たんの吸引や経管栄養（以下、たんの吸引等と記す）』の行為を実施できることになった。そのために、各都道府県では国の指針に基づき、研修事業を実施することが定められた。本研修事業は特別養護老人ホーム等の施設及び居宅において、必要なケアをより安全に提供するため、適切にたんの吸引等を行うことができる介護職員等を養成することを目的としている。本学附属地域ケア総合センターは、研修実施主体である石川県、研修実施機関である社会福祉法人石川県社会福祉協議会福祉総合研修センターから、医療行為であるたんの吸引等の技術研修の場として強く要請されて研修協力機関となることとなった。

石川県における介護保険施設等・在宅におけるたんの吸引等の必要な対象者は年々増加の一途にあるが、これらの施設等の医療体制は必ずしも十分確保・整備されているとは言いがたい現状であった。従来、医師法等の法律に違反するとされていた介護職員等によるたんの吸引等の行為を容認せざるを得なくなり、今般「介護サービスの基盤強化のための介護保険法等の一部を改正する法律」（平成 23 年法律第 72 号）等の中で「社会福祉士及び介護福祉士法」が一部改定された社会的背景を鑑みるに、公立の看護系大学として県内の介護職員等の置かれた現状を看過できず研修の企画・技術指導・コーディネーター等の役割を引き受けるに至った。

2. 研修内容・時間

介護職員等によるたんの吸引等の研修事業には 2 通りある。1 つは、特別養護老人ホーム等に入居している対象（不特定多数の者）にたんの吸引等を実施することができる介護職員の養成研修であり、50 時間の基本研修と筆記試験、5 回の技術評価のための演習が必要である。2 つは、居宅等に生活している対象（特定の者）にのみたんの吸引等を実施できる介護職員の養成研修であり、8 時間の講義と筆記試験、4 時間の演習体験で構成されている。両方の研修終了後、実地研修でさらに技術評価を経て、「認定特定行為従事者」として登録が認められる。登録申請は都道府県において実施される運びとなる

3. 研修受講対象者の選定

本研修の受講対象者は、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、グループホーム、有料老人ホーム、障害者（児）施設等（医療施設を除く）、居宅サービス事業等に就業している介護職員等で、以下の条件を全て満たす者である。①実地研修先を確保できること、つまり、指導看護師等がいる施設・法人内等であること。（原則として、勤務先）、②介護福祉士又は同等の知識等を有するとして施設長が推薦した者であること。平成 23 年度は県内の介護保険施設等に研修受講のニーズ調査を実施したところ、延べ 3000 名余りの受講希望の要望があることが明らかとなった。しかしながら、研修実施期間の限界もあり、初年度は定員 200 名とし、延べ 12 日間にわたる基本研修ならびに延べ 4 日間の演習（技術評価）を企画・実施することにした。

4. 指導者の養成（医師・看護師）

本研修会を開催するためには、指導者の確保が急務とされた。平成23年10月に2日間にわたり、厚生労働省が委託した指導者養成講習会が東京と大阪で開催され、全国の都道府県より推薦された医師・看護師等が参加した。石川県から10名程度の指導者候補が推薦され、受講した。本県の受講希望は、全員看護師であり、医師からの希望者は見られなかった。内訳を見ると、特別養護老人ホームから4名、老人保健施設2名、介護療養型病棟2名、訪問看護ステーション1名、看護教育機関1名であった。能登地区2名、かほく市・白山市等を含む金沢市周辺より6名、加賀地区2名と広く県内から選抜された。

石川県においては、これら10名の指導看護師が講師となり、介護職員向けの研修会に先立ち、指導者養成講習会を11月22日・23日の両日開催した。受講者は医師1名を含む150名余りの看護職であった。

ここで、養成された指導看護師等が演習におけるたんの吸引等の技術評価や実地研修の指導者として介護職員をサポートすることとなった。

5. たんの吸引等の研修事業の実施と修了者数

平成23年11月20日～12月18日までの期間で50時間の基本研修を実施した。週に2日間4週間にわたり集中的に講義を行った。たんの吸引を担当する講師5名、経管栄養を担当する講師4名にて研修を担っていただいた。その他、人工呼吸器や半固形食（栄養剤）に関する講義を担当頂いた講師、救急蘇生を指導頂いた講師等によって運営された。

その後の筆記試験は、3回行って全員が合格した。平成24年1月には技術評価を行う演習を4日間にわたり実施した。最終的に210名余りの介護職員全員の技術評価を終え、合格に至った。

また、3月に特定の者に行う「たんの吸引等の研修事業」を開催した。訪問介護事業所やグループホーム、デイサービス事業所の介護職員が参加し、筆記試験を合格、84名が研修を修了した。

6. 今後の課題

たんの吸引等の研修時の技術評価においては、最終合格者が出るのが、時には深夜0時を回る日もあり、指導看護師の確保が切実な課題として浮きぼりとなった。加えて、その後の実地研修に指導看護師が不在のため、学んだ知識・技術を生かして登録に至らない介護職員の存在が課題として指摘されている。

また、介護職員等の今まで受けてきた教育内容には解剖・生理学の知識や微生物学の学びはごくわずかで、医療行為を実施するときの基盤となる知識体系の不足が大きな壁になると感じられた。医療行為を実施するために必要な防護用具等を各職場で整備できるよう職場の意識改革への啓発も重要な課題である。

さらには、介護職員を支援する看護師の技術力・指導力の差異も次第に明らかとなり、指導者講習会の内容の見直し、講師確保の拡充も必要と考えられた。次年度以降の研修内容に反映させていくことが喫緊の課題である。

平成28年3月に新法の下、新たな教育カリキュラムで養成されてくる介護福祉士の誕生までの間、石川県がどのような方略で、たんの吸引等を実施できる介護職員を育成していくのか、それに指導的な役割を果たせる看護職等をどのように育てていくのか、本学としても調査研究等の客観的データを示しながら提言していくことが重要と考えられた。

6-3 ナイチンゲール没後 100 周年記念「今、よみがえる、

ナイチンゲールからの贈り物」

地域ケア総合センター センター長 川島和代

1. 石川県立看護大学公開フォーラム開催の趣旨と参加状況

平成 22 年度（2010 年）はナイチンゲール没後 100 年の年、ナイチンゲールの不朽の名作「看護覚え書」の珠玉の言葉を現代に伝える映画が全国の看護職 3 万人からの支援によって製作された。この映画をつくる会代表の川嶋みどり氏（日本赤十字看護大学名誉教授）を本学にお招きして、あらためてナイチンゲールの数々の言葉から現代の看護実践に活かすためのヒントを学ぶ機会をつくりたいと思い、石川県立看護大学公開フォーラムを企画した。看護の祖、ナイチンゲールから私たちへの贈り物を一緒にひもとき、看護を語り、看護の価値を再確認することができるのではないかと考えた。

また、本企画は石川県立看護大学主催、石川県および石川県看護協会の後援を得ての公開フォーラムとして位置づけ、運営を地域ケア総合センターが担うこととなった。開催日時は、平成 23 年 11 月 11 日（金）13：30～16：30、会場は、本学講堂とした。公立大学法人化後、一般の方にははじめての有料の公開講座として位置づけた。参加者は一般が約 158 名、教務委員会の協力を得て、授業を調整し本学学生全員（約 360 名）に聴講の機会をつくった。当日の学生の参加者数は 272 名であった。

2. 公開フォーラムの内容

1) 映画上映

石川県立看護大学大学院看護学研究科丸岡直子研究科長の挨拶を皮切りに、公開フォーラムを始めた。まず、「ALL DISEASE IS A REPARATIVE PROCESS 病気は回復過程である -ナイチンゲール「看護覚え書」より-」（45 分）の DVD 上映を行った。“150 年前の出版でもあるにもかかわらず、「看護覚え書」には、今の私たちに役立つ「考えるためのヒント」がぎっしりと詰まっています。そのヒントに触れずにいるのはいかにも勿体ない。そのことをお伝えしたくてこの映画を製作しました。”と、映画の紹介文に書かれてあった。映画は、川嶋みどり氏をナビゲータとした展開で進められており、「看護覚え書」の各章の内容が、現代の看護実践の現場の取り組みや、氏自身の看護実践の体験に照らしてナイチンゲールの言葉を読み解いていく流れでありわかりやすいものであった。

また、「ナイチンゲールと統計学」においては、聖路加国際病院の福井次夫院長の解説、「病院食にスープ」をでは、料理研究家・随筆家の辰巳芳子氏の「スープを医療制度内に取り込んで欲しい」とのメッセージを込めて、病人の回復を手助けする実際のスープの作り方（沖縄のぬちぐすい）が紹介されていた。

2) 基調講演

次に、川嶋みどり氏に「ナイチンゲールを越える看護実践の課題」と題してご講演頂いた。座長は本学の西村真実子学生部長が担った。

川嶋みどり氏は 1951 年 日本赤十字女子専門学校卒業、日本赤十字社中央病院小児病棟勤務、日本赤

十字女子専門学校専任教員、日本赤十字女子短期大学助手、日本赤十字社中央病院耳鼻科外来係長を経て1971年退職。以後、卒後研修、基礎教育に携わっておられた。2003年日本赤十字看護大学教授として就任され、学部長、看護実践・教育・研究フロンティアセンター所長等を歴任された。

現在、日本赤十字看護大学名誉教授、フロンティアセンター顧問、健和会臨床看護学研究所所長。

1995年第4回若月賞受賞、2007年第41回ナイチンゲール記章受賞、著書・訳書・監修書と多数あり。2009年には、映画「看護覚え書」をつくる会代表をつとめ、映画監督今泉文子氏（U.N.Limited）とともに映画制作、監修にあたる、東日本大震災後には「東日本これからのケア」プロジェクト代表を務められ、日本の看護界におけるオピニオンリーダーの一人である。

講演要旨として、ナイチンゲールの言葉から現代にも生かせる普遍性（理論）を読み解くことの重要性を一貫して述べられていた。しかし、現代は、それを乗り越える取り組みの必要性を主張された。それは、看護の不足によって生じる症状は、看護によって回復過程を手助けできることを学問的に検証していくことが重要ではないかとの示唆でもあった。大学が200を超え、大学院修士課程は120大学に及び、大学院博士課程も60を越える現在、看護学の発展の方向性は看護実践そのものの開発・検証ではないかとの主張であった。自身の若かりし頃の看護実践や東日本大震災の被災地での体験から温かなお湯を用いた清拭や手をさすることが苦痛症状を改善し、食欲を引き出したり、浮腫を改善したりすること、そしてその人らしく生きる意欲を引き出すことを語られた。手を用いること、相手に手で触れることの大切さを伝えていきたいとの思いから、「TE-ARTE」（手当て）を提唱していきたいと述べられた。

3) パネル・ディスカッション

最後に、「ナイチンゲールの発見や取り組みを現代に活かすには」と題して、パネル・ディスカッション（座長、丸岡研究科長、川島地域ケア総合センター長）を行った。

パネラーは、北嶋 華氏（石川県立看護大学4年次学生）、諸江由紀子氏（臨床、看護教育での豊富な経験を経て、宮崎県立看護大学大学院修士課程修了、石川県立看護大学助手を経て、現在、金沢社会保険病院看護科長）、神庭純子氏（埼玉教育大学卒業後、教員を経て、埼玉大学教育学部卒業後、聖隷クリストファー大学看護学部・大学院修了、埼玉県川口市保健センター保健師、岐阜医療科学大学保健科学部看護学科専任講師を経て、現在、西武文理大学看護学部准教授）の3名にご登壇頂いた。

北嶋氏は、看護学部3年次に体験した看護学実習時に、明確な診断がつかず、意思疎通の難しい患者を受け持った経験から、日々の生活を援助する中でこまごまとした小さなととのえの大切さを学んだと報告された。また、そのことはナイチンゲールの述べる看護と重なる事を、「看護覚え書」を読み直す中で気づき、確認できたと述べられた。

諸江氏は、新人時代の看護をふり返りながら、最先端の医療実践の中でも救われていない患者を前に無力感を味わい、行き詰った自分の看護の体験を話されたが、それを乗り越えるきっかけになったのが、ナイチンゲールとの再会であったと報告された。多忙な臨床現場ではさまざまな課題を同時に解決する能力が求められるが、どのような患者を前にしても「病気は回復過程」の指針に照らすことによって、安定して患者に関わり続けられると述べられた。

神庭氏は、教職を経て、看護を学びなおす中でナイチンゲールの「看護覚え書」を深く学ばれた。ナイチンゲールの言葉に導かれての地域看護や看護教育の実践について具体的な事例をもとに、持てる力

を引き出す看護、地域をつくる一人一人の力を活かす看護、育ちを支える看護についてわかりやすく語ってくださった。現在、大学教員として教育・研究活動に携わるかたわら、雑誌総合看護に「初学者のための看護覚え書」連載中であり、単行本として出版、現代社より『初学者のための『看護覚え書』(1)(2)』を出版されたところであった。

パネル・ディスカッション後の会場との討論において、唯一医師として参加された参加者から、パネラーの話聞いて、医学とは異なる看護の専門性を再認識したとの発言を頂いた。また、医療機関の看護管理職の方から、病院の中では対応困難な患者は少なくないが、自分たちの取り組みの不十分さを感じることも少なくない、ナイチンゲールの言葉を手がかりに取り組み続けたいとの発言も見られた。本学の学生から、先輩の話は看護学生であっても実習においてもできることはたくさんある、と気づかされたとの発言があった。それぞれの立場から考えるヒントが得られたと考える。

3. 公開フォーラムを開催しての運営上の課題と展望

公開フォーラム終了後、参加者にはアンケートを実施した。アンケート結果は別紙に示すとおりである。アンケート結果ではフォーラムの企画内容全般には高い満足度を得た。本学は、ナイチンゲールコレクションを所蔵している大学でもあり、ナイチンゲールを取り上げたことや、日本の看護界のオピニオンリーダーとしての川嶋みどり氏の知名度にも助けられ、一般の方には申し込み以上の参加者があった。また、はじめて有料講座(1,000円)としたことにもご理解が得られたと考える。

ただ、当日は全学生を聴講可能とし、かつ一般参加も募ったため、運営上の課題として駐車場の確保が挙げられる。対策として、事前にかほく市に大学前の市有地を駐車場として借用依頼したが、市有地は周囲に柵等もなく安全性には課題があり、今後の大学での大型事業を開催する時には十分な安全対策を講じることが重要と考える。

また、会場とした講堂の座席数は450席であったが、参加者が本学教職員も含めるとほぼ、満席近くの聴講が予測され、第2会場として中講義室1に会場の映像を飛ばして座席を確保したが、臨場感には若干欠け、途中で退席する学生もいた。このようなはじめての取り組みには、会場の準備段階での入念な調整が必要と思われた。

今後の本学の事業運営の展望として、講堂の定員を超える大型事業の取り組みの実現可能性について示唆が得られた。また、本学の教員の専門的知識を生かした事業を実施することは、看護大学らしい公開フォーラムを通して地域貢献としての価値を高めることになるのではないかと考えられた。

「今、よみがえる、ナイチンゲールからの贈り物」アンケート結果

一般参加者158名中回答者134名が回答 回収率84.8% ☆一部設問について、未記入あり

Q1 公開フォーラムに参加していかがでしたか？

とても満足	満足	おおよそ満足	不満	合計
67	56	8	0	131

自由記載

- ・ あらためて、基本的なことの大切さ・重要性を感じた
- ・ ナイチンゲール看護覚え書に目を通してみようと思った
- ・ とても良い刺激になった
- ・ 駐車場の問題
- ・ 学生の私語がとても気になった(類似意見を含めて2件)
- ・ 看護師になって30年。日々の業務に流されている状態だったので、看護の願いに戻り頑張りたい
- ・ わかりやすくて、とても勉強になった(類似意見も含めて2件)
- ・ 川嶋みどり先生の元気をいただけて、うれしかった
- ・ 看護の原点に戻るような話を聞いて、本当に良かった
- ・ 改めて、もう一度、本を読みたいと思った
- ・ 看護師としての責任を強く感じた
- ・ 学ぶことが多かった。今後、実践に活かしていきたい
- ・ 会場が寒かった(類似意見も含めて6件)
- ・ 新鮮な気持ちになることができた
- ・ 看護の力を発揮できる現場にしたい
- ・ 看護師歴30年にして、人として看護職を選んでよかったと思えた
- ・ とても暖まる講義だった
- ・ 手のぬくもり、心、看護実践の大切さを改めて気づかされ、ありがとうございました
- ・ 看護とは何か、改めて考え、これからの指針になった
- ・ 川嶋先生の話に勇気づけられた
- ・ 卒後30年を過ぎ、基本に戻る機械と思い参加した
- ・ 看護を振り返ることができた
- ・ 現実の看護師不足の中でのギャップを感じる
- ・ 目からウロコでした。学生の時、一度目を通してただけでももわかっていなかったようだ
- ・ 看護覚え書の面白さに気づくことができた
- ・ 看護の基本でもっとも大切なことを思い出した
- ・ 看護の大切さを実感した
- ・ 明日から早速看護をすることを楽しみたい

Q2 映画「病気は回復過程である」の内容について、いかがでしたか？

よくわかった	わかった	おおよそわかった	わからなかった	合計
74	47	13	0	134

自由記載

- ・ ナイチンゲールの歴史は、今ひとつ理解できていなかったのが、とてもよくわかった
- ・ もう一度、DVDを観たり、本を読んだりしたい(類似意見を含めて2件)
- ・ とても感動した(類似意見を含めて2件)
- ・ 復習でき、内容を再確認できた
- ・ 看護覚え書を繰り返し読みたいと思った
- ・ 患者にとっても、患者を支える立場にある自分にとっても、深く、そして勇気づけられるものになりました
- ・ ゆっくりと看護覚え書を聞かせていただき、良かった
- ・ 全ての看護職者に観ていただきたい(類似意見を含めて2件)
- ・ DVDの朗読が、すごく良かった
- ・ ナイチンゲールが後世に伝えて行きたいものが伝わってきます
- ・ ナイチンゲールの洞察力の深さ、先見性、本質を捉える力がわかりました。
- ・ 不変の理論を学びました
- ・ 看護覚え書を読み直し、自身の行動を振り返ってみようと思った
- ・ ナイチンゲールをいま一度学びたい
- ・ 「病気は回復過程である」「自然治癒力」を胸に看護してきましたが、このフォーラムに参加できて嬉しかったです
- ・ 治療以前に、身近な看護(環境・言葉・手)の必要性があると思った

Q3 川嶋みどり先生の講演について、いかがでしたか？

よくわかった	わかった	おおよそわかった	わからなかった	合計
84	40	10	0	134

自由記載

- ・ 看護覚え書をもう一度読みたいと思いました(類似意見を含めて2件)
- ・ 先生の直接の講義にとにかく感動しました
- ・ すべてが新鮮で、新たに実践に役立てたい
- ・ 改めてナイチンゲールの言葉の意味を理解しました
- ・ 手アータは心がけています
- ・ 若い頃に教わったことが遠くなっていたと再認識しました

- ・「看護師は看護に専心すること」に感銘を受けた
- ・高度医療についていくことで一生懸命になっている(若い)看護師達にTE-ARTEについて話したい
- ・手あての大事さをこれから実践させていただきたいと思います
- ・看護学生の時の純粋な気持ちに戻れたような気がした(類似意見も含めて2件)
- ・川嶋先生が「特定看護師は必要でない」とおっしゃったのを聞いて元気づけられた
- ・日々の看護実践の振り返りが出来て良かった(類似意見も含めて2件)
- ・看護の本質を久しぶりに思い出した(類似意見も含めて2件)
- ・もっと講演を聞きたかった(類似意見も含めて2件)
- ・(川嶋みどり先生から)パワーをいただきました(類似意見も含めて2件)
- ・自分で出来ることをする！と思いました
- ・「手」の大切さに共感できた(類似意見も含めて2件)
- ・今まで以上に「手当て」を後輩達に伝えていかなければと思いました
- ・看護の原点に戻り、考える力を貰ったような感じがする(類似意見も含めて2件)
- ・臨床の現場を振り返り、今からたくさんの課題があると認識した
- ・私も本人の生命力(欲求)を高めることが点滴より重要であると思います
- ・看護の力を信じています
- ・本来の看護師の役割として、ハートと手ということがとても重要だということがよくわかった
- ・心があたたまる講義だった
- ・原点に戻り、また職場で活かしたい
- ・「看護だから出来ること」は、身近にたくさんあると思った
- ・先生の体験・経験を感じる力、伝える力が、とても魅力的に感じました
- ・自然治癒力を高めるよう手伝うことが看護だと、改めて思った
- ・看護に情熱
- ・看護とは何かを考える良い機会になった
- ・学生時代に覚え書で教育を受け、実践してきた
- ・日々、診療の補助等の業務にとらわれがちだが、基本がもっとも大切だと思った
- ・忘れていた「看護の覚え書」を思い出したような気がします

Q4 パネルディスカッションについて、いかがでしたか？

よくわかった	わかった	おおよそわかった	わからなかった	合計
55	44	10	0	109

自由記載

- ・体験を通した発表に、自分の看護を振り返ることができたり、あてはまることがあったりし、よい刺激となった
- ・その方(患者)に合った声かけをする。その気持ちをくみ取ることが大切である
- ・臨床に、いつづけ、考え続けたいと思った
- ・具体的な発表で、とてもイメージが広がり、私にも出来ると思った
- ・実践していくことが大切だと思った
- ・経験でケアをしていることが多々あるが、患者様の立場にたつて、必要とされる看護ケアをできるようにしようと思った
- ・大事なものは、「気づく」という感性だと思った
- ・医学にも匹敵する道具になる！
- ・学生(北嶋さん)の内容が、とても素晴らしかった(類似意見も含めて2名)
- ・看護実践における看護理論の力の大きさに、改めて考えさせられた
- ・対象の変化を実感する看護の実践、看護の力のすごさを知った
- ・各パネラーからの(異なる立場からの)看護覚え書の視点で、わかりやすかった(類似意見も含めて3件)
- ・理論を臨床に活かしたい
- ・看護覚え書以外のナイチンゲールの言葉もたくさんうかがい感動した
- ・改めて看護の見直しが出来た
- ・今も昔も、大切なことは何一つ変わっていないと実感した
- ・諸江先生のお話を通して、臨床においてナイチンゲールの言葉をどう活かしているのか理解でき感銘を受けた
- ・学生の発表を聞いて、業務に追われ忘れていたことあるので、もう一度見直したいと思った

Q5 職場(学校)がある市町名

珠洲市	鳳珠郡	中能登町	七尾市	羽咋市	宝達志水町	能登地区計
2	2	2	19	2	4	31

金沢市	かほく市	河北郡	野々市市	白山市	金沢地区計
55	13	7	9	5	89

加賀市	小松市	加賀地区	富山県	合計
4	6	10	3	133

Q6 この研修をどのように知りましたか？

職場	本学の別の事業で	冊子ナースステーション	本学教職員から	その他	合計
89	23	6	7	8	133

「今、よみがえる、ナイチンゲールからの贈り物」アンケート結果

学内参加者272名中回答者148名が回答 回収率54.4% ☆一部設問について、未記入あり
自由記載欄に勤務経験があるような表記があるのは、教員養成講習会受講生が含まれているため

Q1 公開フォーラムに参加していかがでしたか？

とても満足	満足	おおよそ満足	不満	合計
49	74	22	1	146

自由記載

- ・患者さんに対するケアや言葉がけについて、活かしていきたいと思うことをたくさん学ぶことができた
- ・もっと、川嶋みどり先生の話の聞けたら良かった
- ・自分が知らないことを知り、自分の知識にすることが出来たので、参加して良かった
- ・未だ実習に行っていないが、たくさんの方の経験談が聞けて勉強になった
- ・聞いて良かったと思える学びが、たくさんありました
- ・改めて、ナイチンゲールの本を読みたいと思いました
- ・看護について考える良い機会をありがとうございました
- ・教員養成講習会に参加し、共に出席させてもらえ、良い機会を頂いた
- ・川嶋先生の話が聞けただけで、満足です！
- ・川嶋先生の話が、はやすぎて残念だった
- ・会場が寒かった(類似意見を含めて2件)
- ・聞いていたら当たり前だと思えるが、話を聞いて当たり前じゃないことを知って、今知れてよかったと思います
- ・手を当てる行為には、様々な意味があると感じた
- ・多くの人の看護に対する考えを聞くことができて良かったし、ためになった
- ・普段聞けない話を聞けて、とても良い刺激を受けました
- ・ナイチンゲールの考えの大切さを改めて実感しました
- ・実習が始まり、「記録・記録」になってしまっていたが、このフォーラムで看護は人と人の関わりが一番の魅力だと感じた。

Q2 映画「病気は回復過程である」の内容について、いかがでしたか？

よくわかった	わかった	おおよそわかった	わからなかった	合計
48	74	25	1	148

自由記載

- ・看護の基礎や初心を振り返ることができた
- ・もう一度、「看護覚え書」を読み返してみようと思った(類似意見を含めて3名)
- ・「看護覚え書」の内容がよくわかりました
- ・ナイチンゲールについて、よくわかった
- ・スタッフに見てもらいたいと思いました。みんなで頑張っていきたいです
- ・看護にできることは限りがある
- ・人間の自然治癒力を信じることで、そこに手を差し伸べることの大切さがわかった
- ・このようなDVDがあることを初めて知った
- ・本を読み返すのは大変だが、DVDでナイチンゲールの考えに戻ることができるのは、手軽でよいと思う
- ・最後の文字まで読めたかった(類似意見も含めて2件)
- ・ナイチンゲールの偉大さが伝わった
- ・ナイチンゲールの考えが今の基盤になっていることがわかりました
- ・病気を低下していくものと考えのではなく、回復するために必要な過程であるのとらえることが大切だと感じた
- ・とても奥深いお言葉を多く聞けました

Q3 川嶋みどり先生の講演について、いかがでしたか？

よくわかった	わかった	おおよそわかった	わからなかった	合計
59	71	16	2	148

自由記載

- ・東北で男性の手を温めギターを弾けるまでになったという話を聞き、とても感動しました
- ・看護職にとって「手」は、どんな医療機器よりも万能なものだということを感じました
- ・実習で患者さん1人1人と関わる機会がある中で、「患者さんにとって本当に必要な看護」について改めて感じ考えることができました
- ・「患者さんと手を触れる」という小さな行為でも、大きな意味を持っているのだと思ったし、大切にしていきたいと感じた
- ・患者さんへの清拭や手を触れることの大切さがわかった(類似意見も含めて4件)
- ・看護師の手が患者さんにとってすごく大事なことがわかった(類似意見も含めて3件)
- ・実習でこの内容を活かしていきたいと思った(類似意見も含めて2件)
- ・慢性(の実習)の前に聞けて良かったです
- ・黄色の文字は見づらかったです
- ・「てあーて」が広まっていくと良いと思う(類似意見も含めて2件)
- ・もう少し時間をかけて聞きたかったです(類似意見も含めて5件)
- ・原点を忘れないことが大切だと感じた(類似意見も含めて2件)
- ・触れることの大切さを、看護職に就く前にもう一度考えられて良かったと思った

- ・学生だからこそできる看護「てあーて」の推進ができるのではないかと思った
- ・初めて先生のお話を聴いたが、想像していたとおりのパワフルな方でした！
- ・現代の看護ってそれほど悪くないと思うので、少し違和感を感じた
- ・何年過ぎてもナイチンゲールの行ったことや書き記したことは、看護職を目指す者にとって重要であると感じた
- ・タッチングが患者に与える影響と自分に帰ってくるであろう気持ちの相互作用について考えさせられました
- ・先生の本はとても参考になり、終末期や認知症の患者を受け持った時、とても助けられました
- ・今の看護の長所を残して、新しい看護の形を作っていくかといけなと思った
- ・触れることがどれだけ大切なことか、改めて考えさせられた
- ・最近の看護や技術を全否定するようでした。納得いきません
- ・実習直後で臨床がイメージしやすく、これからの実習に「TE-ARTE」を取り入れたいと思いました
- ・「TE-ARTE」手のぬくもりについての意味を学んだ(類似意見を含めて2件)
- ・臨床での経験の中に、今であっても含まれることばかりだと思う
- ・基本を忘れない、患者に触れて看護できる看護師になりたいです
- ・TE-ARTEを実践できる看護師になりたいです

Q4 パネルディスカッションについて、いかがでしたか？

よくわかった	わかった	おおよそわかった	わからなかった	合計
50	67	10	1	128

自由記載

- ・様々な視点から具体的な事例を含めてナイチンゲールの言葉を紹介していて、とてもわかりやすかった(類似意見も含)
- ・もう一度きちんと看護覚え書を読みたいと思った(類似意見も含めて3名)
- ・ナイチンゲールはすごいと改めて実感した
- ・北嶋さんの話は、自分も実習中に経験したことだったので共感できた
- ・自分がしていたことも看護であったのだと気づくことができた
- ・現在実習中なので、自分が患者さんに行っているケアや言葉がけについて考えさせられた
- ・まだ臨床の場に出たことがないので、先輩方から経験談を聞いて良かった(類似意見も含めて2名)
- ・自分ももっと深く看護を理解して行きたいと思った
- ・頑張りたいと思った
- ・実際に臨床に出るとナイチンゲールの教えがとても活かされることが実感できた
- ・学生のうちによく理解して、臨床に出たときに活かし、学び続けて行きたいと思う
- ・実習中で迷うことが多かったが、対象者のことを一番に考える視点やその人らしい生活になるよう整えるという視点を大切にしたい
- ・患者さん本来の姿について細かく考え気遣うことで、より良い看護ができると感じました
- ・ディスカッションなど大切な時間だと思いました
- ・事例からわかりやすい話を聞き、自分が行っていることの意味を改めて実感できました
- ・教員からの立場のお話をもう少し聞きたかった
- ・看護の仕事を一一般の人に伝えることも大事だが、医師に理解してもらえると良いと思う
- ・あまり興味がなかった
- ・先輩の実習から学んだことを聞けたので、すごく勉強になった
- ・ナイチンゲールの知識を使えば、現代の看護がより良くなる近道になると思った
- ・臨床の方の発表は、あまり主旨が伝わらなかった
- ・先輩の話聞くことができ、また看護師の話聞き、看護の素晴らしさを改めて感じました
- ・看護教員と臨床を行き来して、看護を深めたいと感じた
- ・これから始まる実習に不安があったけど、とても刺激になって頑張ろうと思いました

Q5 今後、どのような講座を希望されますか？

看護に関するもの	健康・福祉	文化・歴史	文学・語学	その他	合計
17	49	18	17	2	103

【看護に関する講座の詳細】

- ・老年看護 小児看護(2名) 地域看護 臨床経験
- ・保健師に関する講座
- ・看護教育について(類似意見を含めて2名)
- ・今回と同じような内容で
- ・看護を語る場が欲しい(2名)
- ・看護実践
- ・国境なき医師団など国際的な活動について
- ・CNSについて
- ・がん看護
- ・海外の看護について
- ・ニードと安全の選択
- ・DVDなどの映像を活用した講座
- ・東日本大震災での看護
- ・日野原先生の講義

【その他の内訳・コメント】

- ・教育に関するもの
- ・人間性に関すること

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事業報告書 (第9巻)

平成 25 年 3 月発行

発行：石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

〒929-1210

石川県かほく市学園台 1 丁目 1 番地

Tel:076-281-8308 Fax:076-281-8309

© 2013 Ishikawa Prefectural Nursing University.
All rights reserved.

著作権は石川県公立大学法人に帰属する。